
幸福宣言！

Fehli

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福宣言！

【Nコード】

N3797L

【作者名】

Fehli

【あらすじ】

神様に刺されて目覚めた俺は女の子！？

〈世界を思い通りにする力〉を手に入れて始まったトラブルな毎日。何故か周りとは変態ばかりで何度も襲われちゃって。

〈鬼〉とかいう化け物も出てきてもう散々。

主人公〈茅ヶ崎湮南〉は憧れの人に思いを伝えることはできるのか――。

祝30,000pvです！！

二章もそろそろ終わりに近付いてます!!

新キャラ織り交ぜ変態戦争中!!

少女襲われが好きな人には良いかも?

ちなみに作者は素人なので生暖かい目でご覧下さい!

笑顔の〈神〉に殺される。(前書き)

勉強の間に書いたりしてる、暇人による小説です。

あんまりうまくはないので、アドバイス、感想、要望などをくださると嬉しいです、励みにもなります。

更新はあんまり速くない……です、すいません。

P S 消えていた分の修復が完了しました。

待っていて下さった方々（いないと思いますけど……）これからもよろしく願います！

笑顔の〈神〉に殺される。

最悪だった――。

幼い頃から両親は仲が悪く、ケンカが絶えない。

殺してやる、とか罵りながら物を投げ合う始末だ。

当然、顔を合わせない二人は、日に日に積もるストレスを俺にぶつける。

祖父母は死んだ。

無駄に余った金は使い込まれ、今ではそれも尽きかけている。

どうやって知ったのか、もう学校には広がっていて、陰湿なイジメが始まった。

初日は画鋏が上靴に。

次の日は持ち物にラクガキが。

最後には机が消えて、名簿の名前すら消えた。

さすがに教師が気付いて、誰がやったんだ、と問いただしたが分かるわけもない。

死にたい――――。

こう思うのが普通だろう。

けれど、《死ぬ》ということが怖い俺にそんなことはできない。

ハンガーラックにロープを掛けて、首を吊れるようにした。

首吊り自殺用具を作って半年になる。

今日も俺はロープの輪を前に、椅子から足を離せずにいる。

「はあ……」

いつだって死ぬるのに、死ねない。

あきらめて椅子から降りようとして、俺は転げ落ちた。

何故かって？

「パッパラパ〜♪おめでとうございます！茅ヶ崎ちがさき 湮南りなんさん」

とか突然部屋に現われた白い羽のある少女が口でファンファーレを言ったら誰だって驚くだろう。

これは……アレだ、うん。

俗に迎えが来たってやつだな。

おお、半年経ってやっと死ねたのか、俺。

案外死んだのって気付かないもんだな。

「な……何全てが終わった、みたいな顔で、白くなってんですか！？」

「や、気にすんな。それより俺は天国、でいいんだよね？」

「はい？えと、あなた死んでないですよ」

「……は？」

「だ……く……ら……死んでないですよ？あなた」

……。

オーケー、状況を考えようか。

俺は今日も自殺しようと椅子に乗った、ここまでは良い。

降りようとして、少女が現れ、椅子から落ちた。

とどのつまり、落ちた。

運良く首がロープに掛ったわけでもなく、ただ落ちた。

ロープを見ても俺の死体なんて無い。

つまり————。

「やばいな、俺。羽根の生えた少女が見える。精神病院に行くか」

「ええ!?! 私は幻覚ではないですよ!?!」

「……これは重症だ、幻と会話ができる」

「うう……どうしたら」

「そうだな……服脱げ!」

「……変態っ!!」

「そうだとも! 男は誰も心に――グハッ!」

思い切り少女に殴られた。

「くっ、やはり無理か」

「当たり前です!」

幻、ではなさそうだ。

信じろと言うほうが無理だろう。

だが、現実には少女はそこに存在しているようだった。

「私はですねえ、不幸なあなたを救うための神様なのです!」

「はー、さいですか」

「あまりに無感動な少年がいる……私は持てる力全てを使い、少年を更に不幸のどん底に……」

「黒いな、お前」

「と冗談はさておき、本題に入りましょう」

「……………」

こんなのが神様でいいのか、案外アバウトだな。

少女の描写が欠けているため、付け足すが、美人、以上。

足りない？

そうだな、銀髪の腰まで届くロング、背は160センチ程。

白いワンピースから白い翼が生えた全身を白でまとめた感じ。

肌はきめ細やかで、顔は人形のように整っている。

俺とは一生交わらない人種の人物、いや神様か。

興味など無いだろうが俺は至って普通の高校生、不幸って以外な。

背は170センチぐらいで、髪は黒色の狼ヘア、手入れとかしないし。

服なんてそこら辺で売ってるTシャツにジーンズだ。

「もしもし、誰に語りかけてんですか？」

「それは不問にしてくれ、ええと」

「神様に名前はありません。そのまま神様とでも呼んで下さい」

「じゃあハ○ヒ」

「それは著作権上問題があるかと……」

てか知ってんだな、神様。

「リィナ」

「それで良いです」

「で、何がおめでどうなんだ？」

「あなたは世界で最も不幸な人間として選ばれました」

「……さようなら」

「ちょ、まだ死ぬには早いですって！」

何が世界で最も不幸な人間だよ、んなもん外国にいくらでもいる。

とりあえずロープに首を掛けるのは辞め、ベッドに座った。

「ああ、何と不幸なこの人生、私より偉い神様は哀れみ、こう
言いました。お前ちよつとこいつの人生変えてきてくれる？」

リィナから何か黒くてドロドロとしたものを感じる。

「こっちの身にもなれってんだ、私は楽しみにしていたアニメやゲームをやろうと仕事を一生懸命にやったのに、それがなんだ。軽いんだよ!」

神様って案外人間味があるものなのかな。

「そんなわけで私はあなたに力を与えます。《世界を好きにできる力》です」

「……は？」

ちょっと待て、話がぶっ飛んだぞ。

《世界を好きにできる力》？

何だそれ？

人生変えてこいって言われて、与える力強すぎだろ。

リィナがどこから出したのか変な形をしたナイフを持っている。

何だ、嫌な予感しかないぞ。

気持ちの悪い汗が背中を流れる。

え……笑顔で近付くんじゃない。

じりじりと部屋の隅まで追いつめられる俺。

「……ま、待ってくれ」

張り付いた笑顔がやけに怖い。

「一度死にましようか♪」

ずっと胸の辺りに衝撃が走った。

わけが分からない。

ああ、でも……これで、死ね……る。

俺の意識は段々とブラックアウトした————。

笑顔の〈神〉に殺される。（後書き）

湊南「おいおい！！俺殺されたじゃねえか」

作者「大丈夫だって、これで死ぬるとか言った時点で生き返れるさ」

湊南「……まあ、いいけど」

作者「そんなことより次回予告！」

湊南「遅刻してしまった、俺！」

作者「朝から、何かの違和感がっ！」

湊南「リィナのせいでもうめちゃくちゃ！」

作者「女子の着替えを覗いた湊南はどうなるのか！」

湊南「ええっ!？」

作者「こうご期待!!」

湊南「感想待ってます！」

〈鈴〉となる気持ち。（前書き）

半ばプロローグのままですが、お楽しみいただけたら幸いです。

今回は湮南の行動原理というか好きな人が出てきます。

リイナは作者のいうことききません、下書きの段階で独り歩きです、はい。

〈鈴〉となる気持ち。

「んん、ん……」

まぶしい、ゆつくりと目を開けると見慣れた天井があった。

朝……のようだ。

薄い翡翠色をした暖かい朝日に照らされ、部屋を見渡す。

特に変わったものもない、いつも通りだ。

リイナに刺された所をそっと触れてみるが、痛みは感じない。

昨日のことなんて無かったかのようだ。

「夢……か」

そう思ったほうが自然だ。

自殺しようとして、心がうつになっていた。

そうだ、そうに違いない。

ふと、壁に掛かっている時計を見た。

9時15分……。

学校は7時30分からだ。

「ああああああ!!」

急いで着ていた服を脱ぎ捨てる。

学校指定の服を着て、ブレザーをはおり、家を飛び出した。

何故か胸の辺りが少しきつかったが、先程同様に異常無いようなので、気にしないことにした。

苛められてるのにどうして学校に行くのかって？

俺には好きな人がいるんだ。

その娘に会うため。

名前は雛宮ひなみや 千代ちよという。

こんな俺でも接してくれて、性格、顔も良い。

もちろん成績だって。

俺が死ねない理由は、彼女がいるからかもしれない。

体力が落ちたのか、少々走るのがきついな。

というか体が重く感じられる。

やがて学校に着き、誰にも会うことなく、教室前までやって来た。

「はあ、はあ……」

息を落ち着かせてから、教室の扉を開けると、俺は絶句した。

雛宮さんを含む、多数の女子生徒が着替え中でした。

もちろん雛宮さんの下着は見ま……ゴホン。

「え、あ……う、失礼しましたあああ!!」

大きな音をたてて扉を勢いよく閉める。

そういえば、今日の2時間目って体育じゃん。

どうして気付かなかったんだ。

これからの人生どうしよう、と俺は頭を抱えて、廊下にうずくま
った。

これからは男子だけでなく、女子からも苛められてしまう。

がらっと扉が後ろで開いた。

おどおどとする俺。

「何で入ってこないの？」

初めは、俺に対しての言葉とは分からなかった。

「……えと、俺、男……だし」

「え？君、女の子じゃないの？」

「う、うん」

あ、あの雛宮さんと会話してる。

夢のようだ、夢ってパターンは無いだろう。

頬をつねったら痛かったもん。

他にも着替え終えた女子生徒が出てきた。

その中の雛宮さんとよく一緒にいる女子生徒が俺の……胸をわしづかんだ。

「ひゃわっ！！」

突然のことで声が裏返ってしまった。

「男子の制服だけど、胸あるじゃん。女子だよ、女子」

「やっぱり？」

「……………」

は？

そういえば胸の辺りが重かった、髪も肩甲骨ぐらいまで伸びている。

「か、かかか」

「か？」

「鏡……」

雛宮さんがポケットから小さな鏡を取り出した。

「はい」

「あ、ありがとう」

落ち着くんだ、茅ヶ崎湊南。

深呼吸、深呼吸……。

そして、鏡を見た———。

黒髪の美しい、可愛い少女が映った。

「この鏡って、壊れてたりは……」

「しないよ」

そうだよな、鏡は壊れるもんじゃない、割れるもんだ。

一度、目を逸らして、もう一度鏡を見た。

吸い込まれそうな程に大きな黒い瞳と目が合う。

「お、俺——」

女になってる!?

どういうことだ、昨日までは男だったじゃないか。

昨日……もしかしてアレか。

神様に刺されたアレ。

夢じゃなかったのか。

どうしてくれんだよ、力を与えます、とか偉そうにして。

——唐突に電信音が聞こえた。

辺りを見回すと、1人の女子生徒が椅子に座ってPS〇をしていた。

問題なのは、〇SPをしている少女の髪の色が銀色だということ。

ふと、こちらに気がついたのか、気軽に挨拶をしてきた。

「おっす」

「おっす、じゃねえよ、このエセ神が!」

そう言って、凄い勢いでデコピンを額にかます。

「あいタツ！」

頭が少し後ろに下がり、きれいな銀髪が揺れる。

「どういう事だよ！力をくれたって、俺、女になってるんじゃないか
えか」

「もう持ってるじゃないですか」

「知らねえよ、何で朝起きたときいなかったんだ？」

「いや、深夜アニメの時間でしたので。帰ったらそのまま寝ちゃ
いました☆」

「何で女になってるんだ？」

ニッコリ微笑んでリィナは言った。

「仕様です♪」

「……………」

何だか妄想に入り始めたリィナにもう1度デコピン。

「うう、神様にデコピンって……」

ダメですよお、湮南さん♪とか、ぞっとする想像だったような
ので少し距離を置く。

「使い方は簡単、叶えたいことを思うだけ！」

やっぱりアバウトだ。

「雨になれ、フハハハハ、とか思ってみて下さい」

後半はともかく、やってみる価値はあるだろう。

外の様子を窺った、本日も気持ちの良い快晴ナリ。

雲1つ無い、澄み渡る青空。

雨なんて降るわけがない。

目をつぶって、雨になれ、と念じてみる。

そうして目を開けると、雨にな———。

「————ってねえじゃねえかつ！」

「いや、ですから、フハハハハまで念じました？」

「そこまでっ?!」

中指の爪を親指の腹に構え、デコピンをしようとして————。

「そんなわけ無————」

突然に視界が白く点滅し、少し遅れて大きな音が響いた。

雷が落ちた、と理解するまで少々時間を要した。

俺はデコピンを構えたまま固まっている。

ざあ、という音が聞こえてきた。

窓に次々と水滴が付いては下へと流れていく。

「なあああっ!!」

「ね♪」

その後の体育の授業は突然にの雨により中止となった。

体育館は?という方がいらっしやると思うが別の学年が使用中だ。

「天気予報では晴れでしょうって言ったのにね〜?」

「ね〜」

多少の生徒が不審に思いながらも着替えだしたので、俺は慌てて廊下に飛び出した。

しばらくは異常気象の曇天を見上げることにする。

「言った通りでしょう。さあ、神様にデコピンしたことを謝りなさい」

「胸を張って威張るな、エセ神め」

「なっ! エセとはなんですか! エセとは」

「言葉通りの意味だ」

もう一度デコピン、アハハ、綺麗な音がするなあ。

「あいタツ、うゝ」

「あ、あのゝ？」

「はい？」

第三者からの介入により、リイナを弄るのを辞め、後ろを振り返った。

早く着替えを済ましたのか、雛宮さんが立っていた。

ああ、やっぱり可愛いなあ。

「失礼だけど、あなたの名前を教えてください？ 誰もあなたのことを知らないみたいなの」

「……………」

まずい、非常にまずい。

茅ヶ崎湮南とは、口が裂けても言えない。

「ああ、この人は茅ヶ崎————モガツ」

黙ってろ、エセ神。

リィナの口を押さえ込む。

「茅ヶ崎……君？」

「いや、その——いところで」

「そっか、それで名前が同じなんだ」

えと、普通は違いますよ？

「茅ヶ崎……鈴、です」

「ん、初めまして、鈴ちゃん。雛宮千代です、よろしくね」

「こ、こちらこそ」

「んーっ！むぐ、むーっ！」

神様でも息が詰まると苦しいのか、リィナが手元で暴れている。

授業だから、と言って雛宮さんは教室に戻って行く。

しばらくして、俺は真っ青になったリィナを解放した——。

〈鈴〉となる気持ち。(後書き)

作者 「災難だねえ」

鈴 「全くだよ……はあ」

作者 「ま、頑張れ。リィナは操縦不能だからな」

鈴 「……………」

作者 「次回予告やっところ。鈴がリィナに襲われm……」

鈴 「言うなあああ!!」

〈性〉活問題を定義する。(前書き)

はい、3話目です。

最近ファンタジーのネタを思いついたので、そっちの方に力が……。もし見つけたら、あ、あのダメな作者の小説だ、と馬鹿にしながら読んでくださると嬉しいです。

それでは、下記の駄文をお楽しみ頂けたら幸いです。

〈性〉活問題を定義する。

太陽が最も高い位置から、人間達を見下ろしている。

たいして不審に思われなかった俺達——奇跡的だな——
は雨を止めて、学校近くの大きな公園に来ている。

「———ですから、口を塞ぐなんて———」

リイナが先程の出来事について謝罪を求めている。

俺はそこら辺の自動販売機で缶コーヒーを買い、ベンチに座って
聞き流していた。

「ふう……」

「———って聞いてます!?!」

「ああ、今日は良い天気だな」

「聞いてないしい……」

さっきの事を考えると、自然とにやけてしまった。

雛宮さんと会話したのだ、当然じゃないか。

色素が抜け、毛先の跳ねた茶髪に、同じくらい綺麗で透き通った
肌。

そこで我に帰ると、変な表情をしたリイナがいた。

「……ふええええ」

「変な声で抱きつくな、うつとうしい」

「だって笑った顔が半端なく可愛かったから……」

そう言って、一際強く抱きついて、顔を胸にうずめてくる。

「んん……あ」

何か突き放すこともできないし、心地がいい。

暖かい体温、髪から良い匂いがする。

家族ではこのような温もりが無かった。

少し顔を上げ、リイナがこちらを覗う。

「泣いて……るんですか？」

頬に触れると指先が濡れた。

「あれ……何でだろう……」

リイナが微笑んだ、とても優しい笑み。

そうして、また抱きついてきた。

「……しばらく、こうしててもらって……良い？」

「はい」

誰もいない公園で俺は泣き止むまでそうしてもらった。

しばらくして、落ち着いたので放してもらう。

よく考えるとものすごく恥ずかしい。

男子が女子の前で泣……あれ？でも今は女子、かな。

だったら良いのかな。

「……………」

まともにリイナの顔を見ることが出来ない。

俺は今、どんな顔をしているのだろう。

「あなたが不幸なら、私はずっと傍にいます。命令……ですから」

「……ああ」

うう、また涙が出てきたじゃないか。

リイナが立ちあがったので、俺も立つと、茂みの方へ誘導される。

女になったからか、少し背が縮んだようだ。

「？」

何かと思えば、直後押し倒された。

首筋に細い指を這わせ、耳に熱のこもった息を吹きかけられる。

「ちょ、何を……ふあ……」

「んふふ、可愛い」

力が抜けてしまった。

銀髪が俺の体に垂れてくる。

「何すんだ！？放せ！！」

腹に馬乗りされ、思うように動けない。

更に両手は押えられてしまった。

残った両足をバタつかせるが何の意味もない。

「心配ないです。全て私に任せて、身をゆだねましょう」

「嫌だぁー！！」

誰か助けてくれ、そう思った。

ピィィィィィ！！

唐突に笛の音、正確にはホイッスルの音が響いた。

「異性不純行為を昼間からやるとは何事なん……って同性？校則に同性はダメとは無かったなあ、ううん」

「た、助けて！」

「ん、了解」

と現れたのは俺の学校の風紀委員長、西原 さいばら 霞 かすみ だった。

艶やかな肩まで垂らした黒髪を揺らして、警察のような青基調の自分で作ったと思われる服を着ている。

「嫌がつとる娘にそんなことしたらあかん、分かるう？」

リイナの横にしゃがんで、自動式拳銃を取り出して構えた。

そこでリイナは霞に気付いたのだが、振り向く前に――。

「ばあん!!」

撃たれた―――かのように見えた。

色とりどりの紙吹雪やリボンが舞った。

「うわああああ!!と落ち着いたか、リイナ？」

「とりあえず驚いたふりをするのは止めてくれん？」

霞は呆れたような溜息をついた。

「声で、ばぁん、とか言われてもな」

「まあ、どいてくれ、リィナ」

「……ちっ」

無視だ、無視しよう。

「……ちっ」

霞は俺と話せる友人の一人で、と向こうは俺のことは分からないが、何故ここににいるのかと聞くと、気がつくといつの間にかここに立っていたという。

力による影響だろうと思ったが口にはしない。

そういえば、助けてくれと思った。

「……ちっ」

そうしたら目の前で不埒な行為が行われ――――。

「……ちっ」

「…………」

ちっ、って止めてもらえます？

文体的に大変見苦しいのですが。

「……ちっ」

……俺たちは霞に別れを告げ、距離を置いてベンチに座った。

むう。

大変、その……トイレに行きたいのだが。

リィナの舌打ちがあまりにしつこいので、トイレの前までは来た。

そこまでは問題無い。

さて、どちらに入ったものだろう。

どちらにも人がいないことは分かるのだが、性別的だと赤色で塗りつぶされたスカートを穿いた女性のマークの方に進まなければならない。

だが、精神的に耐えられない。

ん？

思ってみるといろいろ問題が浮かんできた。

トイレ、着替え、風呂に服。

服ってアレも含まれるわけだろう、その……肌着、とでも言っておこうか、うん。

どうやって買うんだ。

ノーブラもまずいし、あ、言ってしまった。

今まで男だったのにトイレに風呂も結構イタイぞ。

自分の裸体を見て、理性が崩壊しかねない。

「うう、う？」

頭がグルグルとしてきた。

そうだ、リイナを使……いやだめだ。

何を要求されるか、分かったもんじゃない。

先ほどのこともあったし、やめておこう。

これからのことを考えると絶望してしまった。

ヘタっと座り込み、明後日の方向を見る。

「はあ……」

「んふふ、お困りですか？」

と後ろからリイナにのしかかられた。

どこから湧いて出たんだ。

「はっ、トイレの前で座り込んで。そうですね、いきなり茂みはダメですね。察することの出来なかった私を許してくださいさ——」

「んなわけあるかっ!!」

あごに頭突きがクリーンヒットして、鈍い音がする。

「うぐ、痛い……で、何でまた白くなってたんですか？」

「俺は一生この体かって絶望してたときさ」

「え？戻れますよ」

「……………」

そうか、こいつは大事なことを先に言わない奴か。

「何で笑って近づくんですか!？」

「……そういう事は早く言えっ!!」

本日何回目かのデコピンをかましてやった。

なんでも初めてあのナイフで刺されると性別を変えたり、力を与えたりする設定、のようなものをするため、目覚めが遅かったのだそう。

二度目以降は自由にできるらしい。

肝心の戻りかたはもう一度刺すだけ、まあ簡単。

ううむ、まだ希望はあるな。

とりあえず、俺はヘンテコなナイフで刺してもらう。

「んぐっ……」

「大丈夫ですよ、チクっとなりますけど」

いや、もうしたから。

そんな注射じゃないんだから、小さな痛みがした。

体が熱を帯び始めた。

一瞬意識が飛んだが、すぐに戻ってくる。

元の背に戻ったのか、リイナが小さく見える。

「おお、戻った」

「トイレぐらい女性のままでも……」

ボヤキはうて合わないことにする。

こうして俺は黒い男性マークのトイレに入ることが出来た――――
――――。

〈性〉活問題を定義する。（後書き）

作者「あ、戻ったんだ（ひどく残念そうに）」

涅槃「お前の策略など予想できる！」

作者「お前は既に俺の手のひらの上だ！」

涅槃「何いいい!？」

作者「はい、今回はエクストラから霞さんに来てもらいました」

霞「どうも」

涅槃「リィナは？」

作者「アニメ見るってさ」

霞「さっそくやけど、あの娘可愛かったな」

涅槃「（百合フラグ?）」

作者「ぶっちゃけるけど、今後、霞さんの出番ほとんど無い」

ズドンッ!!（↑銃声）

涅槃「フェーリィィィ!はっ!何か血で伝えようと……」

霞さんって胸、大と小どっちが良……

ズドンッ!! (↑再び)

湮南「じ、次回予告します!!」

霞「てか、今回で終わりやろ。作者逝ったし」

湮南「続きますっ!でも作者がストックを使い果たしました」

霞「想像力無っ!!この姿はその具現化かいな?」

湮南「後書きのテーマを募集しますよ。パロネタから質問、トクテーマ、何でもありです!」

霞「出番は? (作者に銃を向けながら)」

湮南「何だか危ないので、さよなら」

ズドンッ!! (死)

霞「また今度☆」

湮南「……………」

舞い降りる少女の福〈音〉。(前書き)

今回はリィナについてのお話です。

一話から三話の短い間の心の中身をお楽しみ頂けたらと思います。

一話の少し前からスタートです、はい。

舞い降りる少女の福〈音〉。

「お前ちょっとこいつの人生変えてきてくれる？」

最初その言葉を聞いたとき、私は思わず聞き返してしまった。

「え、どういうことですか？」

「だからね、この〈茅ヶ崎湮南〉って子？あまりに可哀想だから適当に幸福にしてきてってこと、分かる？」

「それはつまり、人間界に行ってこいと？」

「そういうこと」

近頃、私が人間界にのゲームやアニメに入り浸っていることを知っていた神様は君の方が暇だし、詳しいでしょ、と半ば強制的に空の上から私を追い出した。

そんな理由で私は人間界に來ています。

現在はターゲット〈茅ヶ崎湮南〉さんを追跡中。

幸福にすることは相手のことをよく知らなければ、とても難しいことです。

普通の人は私のことなんて見えないから、隠れる必要も無いのですが、そこはもう雰囲気服まで「ワトソ〇君」とか言ってるような人に合わせてみました。

一人で登校している湮南さん。

周りには大勢の学生がいるのに、いつも独りぼっちです。

登校後、授業が始まりました。

なのに彼はじっと一方向を見ています。

その先には毛先の跳ねた茶髪の可愛い女の子がいる。

スタイル良いな、食べちゃいた……。

気を取り直して放課後、彼は椅子の上でじっとロープの輪を見つめています。

大抵は二時間ほどそうしてから寝てしまいます。

家の中はすごい荒れようで、とても人が住んでいるとは思えません。

学校、下校途中に苛められ、生傷を作り、家ではガラスの灰皿を投げつけられ頭から血を流していました。

けれど、彼の寝顔はそんなこと忘れているかのように幸せそうです。

この時間だけが彼にとっての休息なのでしょう。

ああ、不幸ってこういうことなんだ。

他人事ではなく、まるで自分のことのように思ってしまった。

寝てしまった彼から目をそらし、机の上を見ると、二つの写真が飾ってあった。

一枚は学校で彼が見つけていた少女が写っている。

もう一枚は仲が良さそうに笑っている彼の家族の写真。

そこには、その日観察した彼には無い本当の姿があった。

「……………」

写真には四人の人物が写っている。

彼にその両親、もう一人は妹、だろうか。

彼より小さく幼い少女で、長い髪をポニーテールにまとめて、整った顔が印象的だ。

幸せだった頃の日、彼にもこんな日があったのだと思う。

それから一週間後、私は彼に話しかけた。

「パッパラパ♪おめでとうございます！茅ヶ崎湮南さん」

驚いた彼はバランスを崩して、椅子から落ちてしまう。

私を見て何かを悟った彼は言った。

「————俺は天国、でいいんだよな？」

悲しくなってしまった。

彼はこんなにも死にたがっている。

何でもっと早く救えなかったのだろう。

どうにもならない気持ちで胸が一杯になる。

このときかも知れない、彼を好きになったのは。

死にたがりを見て、惚れるなんてどうかしてる。

でも、そんな彼を幸せにしてあげたい。

だから私は彼を刺したのだ。

昏倒した彼をベッドの上に寝かせる。

苦しそうにうなされている彼が何かを呟いたが、聞こえない。

すると、早送りしたかのように髪が伸び始め、風船が膨らむかのよう
に胸が大きくなった。

体つきも女性のそれになり、別人のようだ。

私はそんな彼にそっと唇を合わせた。

表面だけの軽いキス。

「あなたは私が幸せにして見せます」

それが誓い、私の願い。

苦しそうな彼の顔が少しだけ穏やかになった気がした。

私は彼を見つめてから部屋を出た。

翌日、驚くことに彼は女の子のまま学校に行ってしまった。

面白そうなので、私は急いでいる彼を追いかける。

何だかとても色っぽい。

本人は気付いていないだろうが、すれ違う人々がみんな彼を振り向いている。

そりゃそうだよ、すごく美人だもん。

そして学校に着いた彼は扉を開ける。

私は先回りしておいて、ゲームをしている振りをする。

扉を開けたときの顔といったらね、可愛いの一言しか言えません。

ほんとに抱きつきたい、襲いたい。

「どういうことだよ！〈世界を好きにできる力〉をくれたんじゃないのかよ」

でもって、怒る彼もまた可愛いんです。

高ぶる感情、主に欲望を抑えながらも力について説明する。

デコピンされると嬉しいな。

え？

Mじゃないですよ、彼だから嬉しいんです。

力によって作られた、厚い雲に覆われた空を見る彼。

そこにあの少女話しかけてきた。

「あ、あの――――」

彼を紹介しようとしたら、口を塞がれた。

急接近して、彼の匂いがする。

「んーっ！むぐ、むーっ！（萌え死ぬっ！死ぬ！死ぬって！）」

あるとき私はそんなことを言っていた。

幸い彼には気付かれなかったようだ。

その後は学校からあまり離れていない大きな公園に行った。

彼が嬉しそうに笑っているのを見て、私も嬉しくなった。

でも、少し胸が痛い。

彼はあの少女のことを思っている。

その思いの中に私はいない。

彼に抱きついた。

もっと私を見てほしい、その一心で。

少しして、頭に水が降ってきた。

雨？

上を見ると、彼が泣いていた。

「……しばらく、こうしてもらって……いい？」

少しでも彼が楽になるように、力一杯彼を抱きしめた。

こんなことで嬉しいのなら、いくらでも私はやってやる。

可愛い少女が涙目で至近距離。

直後にまあ、何だ、理性が壊れた。

彼を知って、まだ二週間も経っていない。

だが、私は世界中の誰よりも彼が好きだ。

それだけは確かな感情。

変わらない思い。

「何笑ってんだ？」

「んー、何でもないです」

日も暮れてしまい、私たちは彼の家へと向かっている。

「♪」

「何歌ってんだよ」

「人間幸せなときは歌うのが一番良いんです☆」

「それがアニソンでもか？」

「はい」

今はまだ気付いてくれなくなっている。

私は彼の傍にいる———そう決めたのだから。

今日一日だけでも色々な彼を知ることが出来た。

彼の全てを知りたい。

いつまでもそんな日が続けばいい。

やがて家に着き、私はずっと気になっていたことを尋ねた。

「あの写真の娘、妹さんですか？」

「……ああ、死んだんだ。二年前、事故でな」

「……………」

「気にしないでいいよ」

「でも……………」

何だかおかしいな空気になってしまった。

何も考えずに言ってしまった私は、俯いてしまう。

ばさりと何かの落ちる音がした。

顔を上げると、彼が床にロープを落としていた。

「もう俺には必要ないかもな、ありがとう、リィナ」

「……………」

かあつと頬が熱くなるのを感じた。

駄目だ、何も考えられない。

「ま……また明日！」

「じゃあな」

彼が片手をあげるのを認めると、私は急いで外に出た。

心臓が速く鼓動を打つ音が聴こえる。

幸せにする側が幸せにされてしまった。

私は神様。

彼は人間。

二人は結ばれてはいけないのだろうか。

彼はあの少女が好きなのだ。

叶わない恋。

様々なことを考えてしまう。

とりあえず考えることを止めることにする。

「はあ……」

空を見上げると、一面に光る星があった。

これからのことはこれから考えよう。

そう思った私はまだ収まらない熱を抑え、闇夜の空に飛んでいった――。

舞い降りる少女の福〈音〉。(後書き)

作者 「純情だったんだ……」

リイナ 「何かいけませんか？自分で書いたくせに……」

作者 「暴走してたじゃん、軌道修正だよ。考えてるラストに行けないもん」

リイナ 「まあ良いですけど」

作者 「てかここは初登場じゃない？四話目なのに。何か話すこと無いかなく？」

リイナ 「じゃあ鈴ちゃんの可愛さについて語……」

作者 「るわけにはいけないので、次回予告」

リイナ 「私、湮南さん（鈴ちゃん）とデートしてきました！」

作者 「何気に長いので前編後編に分かれるかもしれません」

リイナ 「てか更新遅くない？」

作者 「そろそろ化け物たちにも出てきてもらいたいな」

リイナ 「会話に困ったら無視する手段止めて？たまに本編でもあるよね」

作者 「本人がデートって思ってるかはともかくシリアスの影が！」

リィナ 「じっくり後で今後について話し合いましょうか？（普通のナイフを持ちながら）」

作者 「……………はい」

リィナ 「ではでは」（作者を引きずりながら）」

作者 「……………（涙）」

男女比へ0対4＜デート。　その？（前書き）

投稿の形式を変えようと思う今！

短くなくてもいいから二日に一回ぐらい更新しようと思っています。

今日アップしたので次は二日以内の更新！

後、前回二話に分かれるとか言ってましたが、もっと長くなる予定です。

「この駄作者が！」と思いながら読んで頂ければ幸いです。

男女比へ0対4デート。　その？

翌日、目が覚めると俺は奇妙な違和感を感じた。

何か重い、非常に重いのだ。

掛け布団が。

その違和感及び重さの正体を確かめるため俺は顔を起こした。

「……あ」

そこには俺を抱き枕にして幸せそうに寝ていたリイナがいた。

「で、理由を聞いておこうか」

「えーと、この世の摂理……です」

両手の人差し指を合わせてウジウジとするリイナ。

「話が大きくなったな、他には？」

「……………」

ポケットを漁りだしたリイナは何かを見つけ、俺の顔に叩きつけた。

「べ、別に誘いに来たんじゃ——痛っ！」

「何だその突然のツンデレキャラは、ごまかせると思うな!!」

でこピンをされて落ち込んだリィナは部屋の隅で『の』を書き始めた。

「ん? 〈涼宮ハ○ヒの激奏〉のチケットか。どうしたんだ、これ」

「道を通る人に非常に好意的に譲って貰いました。一緒に行きません? 今日日曜ですし」

「まあ行ってもいいぞ。というか通行人に何をしたお前」

「知らない」

何かを知っているかのような目……ってひぐら○のパクリだろ、これ。

「気にしたら駄目です」

そうですか、てか俺は喋ってないんだが。

「読者の皆様に語……へブツ!」

「お前は何も聞こえない、お前は何も聞こえない。はい、スタート」

「……………」

おい、どこから出した、そのフリフリの付いたミニスカにキャミソール。

プロの自衛隊のようにナイフで遊ぶな。

後のことは何も言わない。

ただ、俺はこの年齢になって、初めて襲われる少女の気持ちを知った。

「可愛いですよ」

「うるさい!!」

僅かに涙目、屈辱に身を震わせ、頬が紅潮する。

「言葉遣いに気をつけましょうね。あなたは今から可愛い可愛い女の子。『俺』とか品の無い言葉を使ったら、脱がしますよ?」

「ひどい……」

「ジュルリ………ゴクリ」

前者、涎をすすする音。

後者、唾を飲む音。

「食べていいですか?」

「ん、何をだ……じゃなくて何をですか?」

俺に突きつけられる指先。

後ろを振り向いても何もないよ。

ベッドだけ……。

「リイナ、私の服はどうしてキャミソールなの？」

「それはね、お前の胸にある二つの脂肪に触れやすいようにさ♪」

「……じゃあ、どうして私はスカートを穿いているの？」

「それはね、お前の大事な場所に手をつ突っ込むためさ♪」

「………じゃあ、どうして私はベッドに押し倒されているの？」

「それはね————」

少し間を開けて、リイナは狂った獣のように叫んだ。

「お前を食べちゃうためさあああ！！」

赤ずきーん！

オオカミさん、食べるの意味が違います！！

ズドンッ！！

どこかで聞いたことのあるような轟音。

窓が割れて、その欠片が部屋中に散らばった。

わあ、綺麗。

おかしいな、嬉しいのに涙が出るよ。

「食べるなら私を食べてえええ!!」

「人の家の窓をぶち破つといて、何だお前!？」

部屋に入ってきたのは半裸の西原霞だった。

「出番やで!？盛大に暴れなあかんやろ？」

「いや、それがどうやったらポリスコスプレで、しかも微妙に脱げた状態で、この家に突入することに繋がるんだ?」

「だって姉様が湮南とキャフキャフしようとしてたから、私も混ざりたいなあって」

「姉様ってコイツのことか……って何て言ったお前？」

「キャフキャフ？」

「その前だ!コイツと何て言った?」

「湮南やろ?」

俺、女だよな、今。

西原が俺のことを『湮南』と呼んだ。

『鈴』ではなく『湮南』。

つまり———ばれた？

部屋から逃げようとしていた姉様とやらを見つめる。

「っ☆」

「……………」

「さあデートやデート！外で千代が待っとるで」

沈黙を破るかのように西原は俺たちが持っているのと同じチケツトを振る。

「リイナ、よくやった！」

「えへへ、私偉い！」

「ほんと手に入れるのに苦労したわ。なかなかくれへんかったし」

遠い目で西原が呟いた。

「…………何だって？」

「え？だからチケット持った可愛い女の子を見つけて「あああああ！！」したり「あああああ！！」とかやな……」

「平然とそんなこと言うな！」

叫んで台詞を隠すのは、結構疲れるんだぞ。

「さらっと、あなたもそんなこと言っちゃ駄目じゃないですか？」

「主人公だからいいんだよ」

「……そうですか？」

「特に目的の席のチケットを持ってる奴、探すのがきつかった」

「ど……どれだけの人が襲われたんだ」

西原が四本の指を立てて示しているが、単位は聞かないでおこう。

呆れて溜息が出ると同時に、俺は雛宮さんとデートという素晴らしきイベントに心躍らせた———。

男女比へ0対4デート。 その？（後書き）

霞 「更新遅くない？」

リイナ 「ですね」

鈴 「早くしろよ、作者」

作者 「だってテストが……」

リイナ 「鈴ちゃん、今の言葉品がないと思います。ちょっとおいで？」

鈴 「ひっ……」

（ズルズルと鈴はリイナに引っ張られて行った）

作者 「……………」

霞 「別に撃たんで……何やその盾？」

作者 「ストック及び霞さんの出番表」

霞 「……………トーク終わったら話そうか」

作者 「……はい」

リイナ 「すいませんでした。ちょっと話してきましたんで」

霞 「涅槃、ちょっと半裸やない？」

作者 「次回予告させようか」

リイナ 「ほら、やってやって」

鈴 「じ、今回は映画見て、ショッピングをします……」

作者 「もうちょっと」

鈴 「映画中は暗闇で、服屋の試着室で……うう」

霞 「従順だね」

作者 「何したんだよ？」

リイナ 「何でしたっけ？」

霞 「私にも……」

作者 「危ない……終わらせろ、鈴」

鈴 「それでは、また見てください。さようなら」

男女比へ0対4＜デート。 その？（前書き）

クオリティが大変残念になっております。

映画館までいかなかったし、予定なんてズレまくりです。

遺影☆

男女比へ0対4デート。　その？

舞台が開演するのは午後からということなので、俺達四人は適当に時間を潰すことにした。

時間を潰すって言っても、近くの店を周回するだけなのだが、歩くだけでもwith雛宮さんなら地獄だって楽しいだろう。

すみません、嘘です。

ああ、可愛いよ、雛宮さん。

「——鈴ちゃん？」

「……………」

さて、今現在俺にはいくらかの問題が存在する。

問題？　俺は『茅ヶ崎湮南』ではなく『茅ヶ崎鈴』として認識されている。

そうなのだ、彼女の眼に『鈴』が映っていても、そこに『湮南』はいない。

どこか、悲しい。

見えないガラス越しに現実を見ているかのような孤立感。

見てほしいのは『鈴』ではなく『俺』なのだ。

問題？ 西原霞は俺を湮南だと知っている。

理由がまた面倒くさくて、リイナが西原とキャフキャフな行為をして口を滑らせたらしい。

どうやって行為に及んだかって？

知らん、作者だって知らん。

ご都合主義ってやつだ。

問題は西原がこのことを他人に言うかだ。

本人曰く他人に言う気は無いらしい。

「そのほうが面白いし……ね？」

夜、出歩くときは後ろに注意することにした。

何だよ、最後の「ね？」って、襲う気じゃねえか。

問題？ リイナと西原がどこかに走って行った ↓ 雛宮さんと二人きり。

「鈴ちゃん？鈴ちゃん？」

「っ！！」

目の前で振られる手のひらと、瞳を覗きこんでくる顔。

憂鬱で現実逃避していた俺は思い巡らすのを止めて、後ろに飛びずさった。

「私、何かいけないことしちゃった？」

違う、違うよ。

ものすごく恥ずかしいんだよ。

火照った顔を押さえて、しゃがむ。

「い、いえ。何もしてない……です」

「そっか、良かった。嫌われてるのかと思っちゃった」

そう言って彼女は微笑んで俺の手を握った。

「どこかに行こうよ。鈴ちゃん、行きたいところある？」

こういう時って、女子はどこに行くんだろうな。

クレープ屋とか、服屋とかだろうか。

「服、買いたいです……」

「ん、そだね。じゃあへクラウンナイトって店でも行こっか？」

「はい」

「予定通りターゲットは服屋に向かう模様やで、どうぞ」

「計画通り頼みます」

木々の影からそれを見ていた二つの人物、リィナと西原は不敵な笑みをした。

「今回の計画がうまくいけば、湮南及び鈴ちゃんは私のもの☆」

「二人で従順な犬に育て上げましょう!!」

阿呆な二人は周囲の人物からイタイ目で見られていることに気付かず、手を取り合った。

ゾクリと何か寒気がした気がする。

「どうしたの？」

「いえ、何も」

こういう時は気にしないのが一番だ。

この幸せな時間を楽しもう。

やって来たヘクラウンナイトは老舗のような古い雰囲気が漂っていた。

店の扉を開けるとカランと音がした。

「いらっしやい」

半分寝ているかのような背の小さな女性が店の奥から出てきた。

ぼさぼさの肩ほどもまでの髪に、ラフな格好をして、その上に地味な色をしたエプロンを着ていた。

その中心には自分で刺繍したと思われる不細工な王冠が浮かんでいた。

「千代ちゃんか、もう一人は誰だい？」

「私の友達で鈴ちゃんって言います」

「これはどうも。店長っていつでも一人だけど、崩月ほうづき 楓かえでだよ」

表情も変えずに礼をされたので、こちらも礼をする。

「こちらこそ」

楓さんは気だるそうなゆっくりとした動きで俺の目の前までやって来た。

「……全部、男の服だね」

「……………」

「髪の手入れもしてない」

「……美人なのに、勿体ない」

「ひゃうっ!!」

いきなり華奢な腕が伸びてきて、胸を触れ、そのまま腰を通って、お尻まで手を這わせた。

何か体の芯に電気が走るような感覚が来て、力が抜けた。

「ななな、何するんですか!？」

「……B73, W51, H58か」

「こ、個人情報をごにしないでください!!」

「結構スタイル良いね、鈴ちゃん」

ひ、雛宮さん？

その手に持っているゴスロリは何ですか？

ワキワキとしている手も止めて下さい。

「ちょ、楓さん。止めて下さい!」

「まあ、そういうのも良いんじゃないかな。僕は否定しないよ？
服ができるまで一時間くらいだから。何だ、ご愁傷様」

そういつて楓さんは奥の部屋に入って行ってしまった。

「鈴ちゃん、あっそびくましょ☆」

「いやあああ!!」

それから、服ができるまでの一時間、私は着せ替え人形として扱われた―――。

男女比へ0対4デート。 その？（後書き）

作者「うわあ……」

霞「計画通り」

リイナ「どういうこと？」

霞「千代は服を作るのが好きでな、いっしょに服屋なんて行く
とああなるんや」

リイナ「なかなかやりますね」

作者「今回はこのメンバーで次回予告かな」

リイナ「今度は襲っちゃいますよ？暗闇で」

霞「犯罪やん」

リイナ「訴えられなければいいんですよ」

霞「良くないって!!」

作者「良いんじゃない？フィクションだし」

霞「存在否定された!?! 私たちはいないって言った!?!」

リイナ「仕方ないです」

作者「出番増やしたんだから文句言うなよ」

霞「……………」

リイナ「こんな娘ほつといて、PRです。誤字脱字感想指摘等々ありましたらお願いします☆」

霞「単語ごとに点打ちいや。中国語みたいなので」

リイナ「要望もオツケーです！」

霞「無視すんかい……」

作者「それではそろそろ……」

リイナ「そうですね、また今度♪」

霞「また見たってや」

男女比へ0対4◇デート。　その？（前書き）

また予定がずれて会場まで行っていないません。

フラグとかばら撒きたいので勘弁です。

今回は少し短めです。

すいません。

男女比へ0対4デート。　その？

嬉しいようで悲しいような一時間が経過した。

途中からファッションショー的に雛宮さんに写メられたが、何か言おうとすると次の服に着替えさせられる。

必死に試着室から出てきたところで楓さんが立っていた。

「そろそろ良いかな？」

「是非！！」

そう言うとき楓さんは何故か口ごもってしまった。

「最近の娘は積極的というか、何というか……」

「？」

私を立たせると隣の部屋に案内された。

「じゃあそこに寝てくれるかな」

「ね、寝る！？」

部屋の真ん中にあるベッドを楓さんが指さした。

音をたてて閉じられた扉の鍵を閉めた楓さんは無表情で私を見つめた。

いや、そんな不思議そうに見られても。

そもそも寝るってどういうことですか。

「……………」

無言の楓さん。

……。

……………。

……………。

「分かりました！分かりましたからそんなに顔を近付けないで下さいー！！」

「そう？」

ほんとに心が読めない人だな、この人。

「鈴ちゃん、どこに行ったの？」

雛宮さんが私を探しているようだ。

ん？

でもなんで楓さんは鍵を閉めたんだろう。

部屋に満ちたアロマのような甘い匂いが鼻につく。

何だが胸が熱くてドキドキする。

下腹部の方もジンジンとして変な気分だ。

「何ですか……これ」

立っていられなくなった私は床に座り込む。

吐息もすごく熱を帯びている気がする。

「簡単に言うなら媚薬かな」

【媚薬】

？性欲を催させる薬。淫薬。

？相手に恋慕の情を起こさせるという薬。惚薬。

って冷静に辞書のような解説をしてる場合ではない！

「そろそろ我慢出来なくなるんじゃない？」

「な、何がですか?!」

私思うんだけど、どうも最近変態としか会ってない気がするんです。

「大丈夫、僕経験あるから」

何のですか!?

楓さんの手が倒された私の胸に乘せられて、奇妙な動きをする。

「ん……ふぁ、んん」

ああ、駄目だ……何も考えられない。

私の思考は真っ白に塗り潰された。

「ジャジャーン!! ヒロインのピンチを救ってギャルゲーみたいに好感度を上げるため、リイナ参上!!」

とリイナが天井から生えてきた。

少し遅れて轟音と共にドアが吹っ飛ばされる。

「愛しの犬を手に入れるため、霞が登場やで☆」

「……………」

一瞬だが楓さんから重たい空気を感じた。

何か獲物を見るような暗く冷たい瞳。

すぐに元に戻った楓さんはゆっくりと立ち上がった。

「どうしたんだい君たち」

「好感度up!」

「犬探し!!」

まともな奴はいないようだ。

「もう連れていってかれて構わないよ。着替えも終わらせたし」

「え、あれ？」

いつの間にか可愛い服を着ていた私。

さっきのは、夢？

「ここにいたんだ、鈴ちゃん」

「さっさと行くで」

「行きましょう、鈴」

「呼び捨て!？」

差し出されたリィナの手に握まり、立ち上がると私たち四人はヘクラウンナイトを後にした――。

静かになったヘクラウンナイトで楓は二人の少女のことを考えていた。

一人はリィナと名乗った白い少女。

誰の邪魔も入らぬように結界をしていたにも関わらず、何も無かったかのように部屋に入ってきた。

もう一人は霞という少女だ。

こちらの方なんて結界を破壊して部屋に入ってきた。

「神の力と永遠の命。力がなければ命が手に入らない。何とかしなければ……」

変わらず無表情のまま、楓は思考に意識を落とした――――。

男女比へ0対4デート。 その？（後書き）

作者「鈴はどうです？楓さん」

楓「まあまあじゃないかな」

作者「僕キャラで無言って良いと思いますよ」

楓「そう？」

作者「次回予告でもしましょうか」

楓「会場に着いた四人に迫る影……」

作者「キャラ立てるためにあくまで口数が少ないね」

楓「良いんじゃないかな」

作者「会話がどうしても長く続きませんね……」

楓「……………」

作者「まあ、いつも通り鈴が襲われ、シリアスに入りだします」

楓「また見てくれるかな？」

作者「タモ〇さん連れてこーい!!」

男女比へ0対4デート。 その？（前書き）

急展開です。

やっとタグにあったチートが出せそうです。

ああ、長かった。

戦闘描写とかは次くらいだと思います。

最近、お気に入り登録が一件減って、また戻ってきました。

本当にありがとうございます。

意見感想を頂けると頑張ることができそうです。

それでは駄文を少しでもお楽しみ頂けたら幸いです。

男女比へ0対4でデート。　その？

会場は多くの人で賑わっていた。

薄暗い明かりが広いホールを照らしている。

「広いですね♪」

「そうですね」

「人多いやん」

「このぐらいが普通でしょ」

上から順にリィナ、雛宮さん、霞、私だ。

「てかこの首輪何!？」

「いや、迷子……じゃなくて迷い犬にならんようにな」

「なりません!」

「頬を染めたら告白チャンス!？」

「ではありません!!」

溜め息を吐いて、辺りを見回す。

誰かと目が合った気がする。

もう一度見ても楽しそうに話す人々しか見当たらない。

まあ、自意識過剰なのかな。

「鈴ちゃんの隣はあたしよな？」

「いいえ、私ですよ？鈴」

「人気だね、鈴ちゃん」

あ、いや助けてもらう方向は無いんですね、雛宮さん。

四つに並んだ空白の席。

ひ、雛宮さんの隣に座りたい。

「と……隣に座らない？」

「んー、別に良いよ？」

うわああい、やったよ。

私は内心喜びながら彼女の手を引いて隅の席についた。

そうすれば演奏中に襲われる可能性も無いだろう。

と座ったまでは良かった。

じゃあどうしたのかって？

リィナが先に座っていたのだ。

な、生暖かい……座ったときに変な声を出すな！

「そんなに私が好きなんですネ！そうなんですネ！？」

壊れてるよ、登場人物のほとんどが変態だよ。

「阿呆なことやってないで、どいてくれます？」

精一杯の怒気を込めて睨み付けても、馬鹿には恥ずかしさに震える少女に見えるらしい。

筋力の無くなった腕で力一杯リィナを投げ飛ばす。

「私、空飛んでる！羽なんて無くても飛べてる！！」

そのままの勢いでリィナは霞に衝突した。

頭と頭がぶつかったのか鈍い音がしたが気にしない。

「座ろっか？」

「良いの？あの二人」

「死にはしないと思う……」

私は右隅の席に、その隣に雛宮さん、リィナ、霞の順に座っていた。

その後はジュースを買ったり、パンフレットや限定グッズを買ったりしてから演奏が始まるのを待った。

十分ぐらいしてから、舞台がだんだんと暗くなってきたので、観客のざわめきが静かになった。

ステージを覆っていた垂れ幕がゆっくりと上昇していく。

「何や眠うなってきたわ……」

「早っ!! まだ始まってないのに」

「私も眠いな」

「って雛宮さんも!？」

「鈴、何か会場の様子がおかしいです」

「え？」

そういえば幕が上がっているのにいつまで経っても演奏が始まらない。

ステージの上の人々たちをよく見ると、全員寝てしまっているようだ。

会場の人々も次々に意識を失っていく。

「何が……起こっているんだ!？」

「おそらく鈴の命でしょうね」

「何で!？」

「何でってほら、〈力〉持ってるじゃないですか。あれって心臓を食べることで奪うことが出来るんです」

突然の事実を叩きつけられる私。

心臓だって？

何だそりゃ。

そんな世界があって良いのか、〈力〉を持った時点で私はファンタジーに足を踏み入れている。

けれど、でもそんなのって理不尽だ。

私は好きで〈力〉を手に入れたわけじゃないのに。

「戦いましょう、鈴」

「えー!？」

戦うって何さ、どっかのRPGみたいのは嫌だ。

そのうち魔王とか出てきたらどうすんの。

無理、無理です。

「そろそろ〈鬼〉が来ます」

〈鬼〉って何だ。

そう言おうとした瞬間、その叫びは聞こえてきた―――。

男女比へ0対4デート。 その？（後書き）

鈴 「逃げていいですか？」

リイナ 「早っ！！主人公がこれでいいんですか！？」

作者 「良いんじゃない？」

鈴 「ですよね」

作者 「後で、すっごいのと戦わせるから」

鈴 「ええええええええええ！！」

リイナ 「まあ、今回は正直雑魚キャラにする（予定）らしいよ？」

鈴 「何さ（予定）って！今までのコメディはどこに？」

作者 「次回予告しよっか」

リイナ 「〈鬼〉達がワラワラワラワラWWW」

鈴 「嫌ああああ！！」

作者 「迫り来る魔の手から千代たちを救うことはできるのか！？」

リイナ 「いや、できる（予定）なんだけどね？」

鈴 「すごく（予定）に悪意を感じるんですけど！？」

作者「まあ次話も見たって下さい」

リィナ「それではまた今度☆」

鈴「うう……それでは」

男女比へ0対4デート。 その？（前書き）

今回の文は大変残念な出来栄です。はい。

敵キャラなんて雑魚すぎて話になりませんでした。

うーん、もっと強くするべきだろうか。

まあそこらは許して頂けると幸いです。

一日で更新するの今日が初だな。

たぶんそのせいです。下手なのは。

それではお楽しみください。

男女比へ0対4＜デート。　その？

会場に響き渡る雄叫び。

始まりには何か温かいものが頬に飛んできた。

拭ってみると、真っ赤な血液がベツトリと手に付いている。

「ひっ……」

私は出てこようとした悲鳴を押し殺した。

風を切る音がする。

何かが動き回っているのだ。

「鈴、明かりを点けてください！」

「あ、明かり！？」

照明を点ける、点け！点いてよ！！

ゆっくりと辺りが明るくなっていく。

はつきりとは見えないが、小さな子供が沢山いるようだ。

ただ、耳が尖っていて、赤く輝く瞳が見える。

人間じゃない。

それだけははっきりと分かる。

完全に明るくなったとき、私は目の前の光景を疑った。

「リイナ！？おい、しっかりしろって！！」

あの白かったワンピースが赤く染まっていた。

リイナは何かから私を守るために。

言葉なんて気にしていられない。

雛宮さんと霞はまだ気持ち良さそうに眠っている。

「マダ動ケルノカ、〈力〉ノ所有者ダ！アイツヲ捕マエロ！！」

脳に直接響く、甲高い声が聞こえた。

ゲームでよく出てくるような化け物だ。

確かゴブリン辺りに近い姿をしている。

灰色の肌に小さな角が一本あり、尖った耳をして醜い顔をしていた。

会場中にいたそいつらは一斉に赤い目でこちらを振り返った。

「「「心臓！！神ノ力ヲ持ツ者！！」」」

壁に天井さえもつたい、多くの足音が動き出した。

こいつらがリィナを？

力が欲しいからこんなことをしたのか？

私は叫んだ。

その場の全てに、リィナを傷付けた下衆たちに。

力の限り、喉が潰れるかと思うほど。

「止まれええええっ！！」

直後、余韻を残して静寂。

何も聞こえない。

鬼たちは皆その場で固まっていた。

「……消え失せろ」

瞬きをすると視界から一匹だけを残して見えなくなった。

「失せろ」

「エ？何デ……ドコニ行ツタ？」

どうやらこの一匹には力が効いていないらしい。

「鈴、そいつは奴らのボスである核コアです。物理的でなければへ力
／＼は効きません」

「リィナ！！大丈夫なのか？」

治れと念じてみた。

そうすると巻き戻しのようにリィナの血肉が戻ってきてやがては
元通りになった。

苦しそうにしていたリィナの呼吸が整っていく。

「で、覚悟はできてるんだよね？この野郎」

「ヒッ……」

ものすごく笑顔で刀を呼び出した私。

「誰にやるように言われたんですか？」

リィナが小さな鬼を見下した。

この鬼から見れば、まさに地獄絵図だろう。

「イ、言エナイ……殺サレル」

「……再度質問しよう、誰に言われた？」

刃を首に当てて、鬼を壁に追い詰める。

「ワ、分カタ！言ウ、言ウカラ止メテクレ！！」

少しだけ手にこもる力を弱めてやった。

本当に誰なのだろう。

「真ッ黒ナ少女ダヨ！名前ハ確カ……ウッ」

「どうした、言えよ！」

鬼が急にプクプクと太り出した。

段々と球に近付いていき、目玉が今にも飛び出しそうだ。

やがて風船が割れるような音をして破裂してしまった。

「口封じの何かがされていたんでしょう」

「リィナ！！」

「な、何ですか！？急に抱きつかないで下さいよ」

「俺を庇って痛い思いをさせてゴメン！！」

「へ？いや別にいいですよ、それより会場を元に戻してもらえます？そろそろ皆起き出すと思います」

「ん、そうだな……」

元に戻れと念じ始めると魔法のように修復が始まった。

しばらくはこうしていないと駄目のようだ。

私は今日あったことに黒い少女のことを考えることにした――
――。

男女比へ0対4デート。 その？（後書き）

作者「弱すぎる……いや書いてて予想してなかった展開」

鈴「いや私が強すぎるでしょ。言葉だけで敵消えるって楽しくないです」

リイナ「そのための核設定です。力だけじゃ倒せないようにブロックです」

霞「ほんと先のこと考えないで書いとな、あんた」

作者「しょうがないw」

リイナ「さて次回は？」

鈴「とりあえず、あと一回でデート編終わらせて学校に行く予定」

霞「あゝ、変態の集まりである生徒会も出るんかいな」

鈴「何それっ!？」

作者「また襲ってもらおうかなと思ってね」

リイナ「読者の目が腐りますよ？」

作者「大丈夫、文章力無いし。書いてて楽しいもん」

鈴 「（私が襲われるよく原因はこいつのせいだった……）」

霞 「ま、そんなわけでサイナラ〜」

リイナ 「また見てなんて言ってな————イタイ！」

鈴 「そのキャラは止めなさい!!」

リイナ 「うう……」

男女比へ0対4◇デート。 その？（前書き）

あり得ないぐらい短いです、今回。

エピソード的に一区切りなのでどうかご容赦を。

ではどうぞ←←

男女比へ0対4〈デート〉。　その？

その後は何事も無かったかのように演奏が始まった。

綺麗な音色が広いホールに響き渡る。

と数分もしない内に内股に手が突っ込まれた。

「っ！……」

「さっき（前話）〈俺〉って言いましたよね？」

「ちょ、ひど……んん」

不可抗力だろ、それは。

あ、ナイス霞。

そのまま連れて行って下さい。

何？

抜け駆けとか聞こえたぞ？

「ひ、雛宮さんは？」

「席変わってって言ったらあっさりと」

「まあ、三人で愛を育もうや」

「嫌だ！」

「何で？」

戻って来れなくなるに決まっている。

少なくともリィナが霞をそうしてしまったように。

「席に戻れ！！」

近くの観客たちが何人か振り向いた。

はい。

すみませんでした、大声出して。

二人はいつの間にか元の席に戻っている。

ち、畜生。

私だけに罪を擦り付けないでくれ。

ちょこんと隣の席に座る雛宮さん。

「演奏綺麗だね」

「うん」

ああ、そんな笑顔で話しかけないでよ。

心臓がどうかなっちゃいそう。

やがて全てのプログラムが終了して会場を出た。

「ほなな」

「さようならー」

「うん。さよなら」

「バイバイ☆」

後は大したイベントも無く、適当なファストフード店でお開きとなり、幸せなひと時に別れを告げた。

さてと、リイナに色々と聞かなくちゃいけないことがあるがそれはまた今度にしよう。

何か疲れたし。

私は夕日に染まった空を仰いで溜息をついた――――。

「予想通りだったけど、まさかここまでとはね」

鬼たちが弱いと分かっていた鈴たちを襲わせた。

運が良ければ〈力〉が手に入るんじゃないかと。

それでも核以外が一瞬で消されるとは思わなかった。

楓は暗闇に向けて声をかけた。

「失敗だよ、君」

「そんなの想定内じゃない、あなたには勝てないわ、楓」

「負ける気は無いんだけどな、次どうしょっか？」

「〈混乱〉（パニック）と〈転換〉（トレース）でも出したらどうかしら」

「分かった」

姿は見えないが確かに少女の声がする。

「……………」

「どうしたの？」

「綺麗な声だなんて」

「……馬っ鹿じゃないの？」

「うん」

「肯定してんじゃないわよ、馬鹿」

「うん」

「あーもう！どうしてそんなに自虐的なのよ」

「はは、何でだろうね」

「ほんとにもう」

少女は呆れたように闇の中でうごめいた――――。

男女比へ0対4デート。　その？（後書き）

作者「ラノベで言うならここまでが一章です、たぶん」

リイナ「気付きました？いつの間にか鈴ちゃんの一人称が〈俺〉から〈私〉になってます」

霞「暇な人は読み返してもいいかもな」

鈴「わた……俺っていつまでこのままなんだ？」

リイナ「ああもう、無理しない」

鈴「嫌だい、わた……俺は男なんだ!!」

作者「さあ、次回予告の時間だ」

鈴「私のことは無視かよっ!……あ」

霞「染みついとるな、遺影☆」

リイナ「この調子です☆」

霞「今回は〈鬼〉とか〈力〉とか世界観をどうにかするみたいや」

リイナ「この世界ボロボロですもんね」

鈴「素人に完ぺきを求めてはいけません」

作者「……………」

リイナ「気が付けば十話目ですね」

霞「ほんまかいな、いつまで続くんやろな」

鈴「作者が精神的にくたばるまで？」

リイナ「只でさえ文章力無いくせに頑張りますね」

作者「酷い……事実だけど」

霞「誰かこの小説の挿し絵書いてくれんやろか」

鈴「無理でしょ、こんな駄文」

リイナ「自分で描け！駄作者め！！」

（たび重なる罵倒により作者逃亡）

鈴「あ、逃げた」

霞「ほっときや」

リイナ「はい。感想や意見、指摘に誤字等々ありましたらよろしく
お願いします☆」

鈴「それでは、また今度！」

霞

「ほなな」

〈力と鬼〉について（前書き）

設定です……。

友人に設定見せてって言われて固まりましたねw

世界観？

何それ、おいしいの？

至急〈力と鬼〉についてまとめました……最低限。

〈力と鬼〉について

「……………ってわけでしてね」

「おい、今回の話の大事なところ省略されてるぞ、リィナ」

「良いんです。書くのが面倒らしいので」

「あー、ちょっと良いか？」

「何です？」

「今回、状況描写無いらしいから、わた……俺たちが言わなきゃならん」

「と湮南は嫌そうに私に話しかけた」

「適応早いな！」

「設定とかだらだら書いて読まない人がいるじゃないですか。だったら全部台詞にしてみようぜ！みたいな感じで今回は書かれてます」

「もちろん読みたくない人は読まなくていいから、自由にしてくれ」

「てなわけで湮南さんの部屋にてトークしましょう☆」

「今回は力についての語りなんだが、何話すんだ？」

「さあ？ 実際まだほとんど力使ってないですしね」

「だろ？ たいして語ることも無いんだわ」

「一応次の二章からはフルに使わないとヤバイみたいですよ？」

「何だか霞も不吉なこと言ってたし気を付けなきゃな」

「ボヤキを入れる湮南に、私はあのナイフを突き立てた」

「いや、まだ刺さってねえから。てか刺すな、ナイフは床に刺さ
つとけ」

「グサツ☆はい、これが力の制限？ ですね。性転換中じゃないと
力はい使えません」

「……遠慮ねえな、この野「反抗期な鈴に問1です！ 女の子のと
きに品の無い言葉を使うとどうなるでしょう！？」……」

「次です！ 制限？ 過去未来に行ったり、見たりすることはできま
せん」

「何で？」

「過去未来を大きく変えてしまわないようにです。極端に言うな
ら未来で知っている人に殺されると知ったとします」

「はあ……」

「その人に殺されないようにするのは構いませんが、殺してしま
う人がいたんです」

「怖っ!!」

「あ、そうそう。心を扱うことも不可能です、当然ですね」

「それこそ楓さんみたいに媚薬買ってこいって感じですよ」

「さっきのが制限？で、最後の制限です。生命を復活させること
はできません」

「出来たら怖い」

「うん。まあ方法はあるけど知らなくていいですよ」

「……………」

「どうしました？」

「いや、絶対いつか出す気だなんて」

「さて、力の説明も終わりましたし、私たちのハネムーンにでも
行きましょうか」

「は？どこですかそれ、行く気ないんですけど」

「ラブホです、ラブホ!! いざ愛の巣へ行——」

「くわけないでしょうが!!」

「痛い、痛いよう。鈴、ひょっとしてS? イヤン」

「私はノーマルです!! デコピンぐらいで何でそうなるんですか
!?!」

「いや、なんか嬉しかったから」

「それはあなたがMなだけでしょうが!!」

「DV?」

「私がいつあなたと家庭を築きましたか!?!」

「冗談はさておき、次は鬼についてです」

「あー、あの化け物?」

「消え失せろで消すってどうです? 主人公として」

「どうもしないです。すんなりいくなら大歓迎」

「設定としては神様の世界〈天界〉ってのがあって、何らかの事情でそこに行けない霊的な何かを基本的に鬼って呼びます」

「霊的な何かって何?」

「魂みたいなもんです。口開いたらモケーって出るアレです」

「出ないから!」

「そこら辺はほっといて下さい。変わる可能性も無きにしもあらずですので」

「そうですか……」

「時間切れとなりました……。疑心によりバラバラとな——」

「ベアト〇ーチエエエ！」

「うるさいです。耕しますよ？ うー！！」

「……遠慮します。（著作権！！）」

「まあそろそろ終わりにしましょうか。二章も書きたいそうなので」

「そうですね、今思ったんだけど私とリィナじゃ口調分かりづらい？」

「基本は交互に喋ってるので大丈夫だと思います、はい」

「それではさようなら！！」

「まったね☆」

〈力と鬼〉について（後書き）

鈴 「そうだった、まだここがあったんだ……」

作者 「もうちょい頑張れ」

リイナ 「もうアニメ始まるんですけど……！」

作者 「次回予告サツとやったら行ってよし」

リイナ 「二章始まります！」

鈴 「待て待て待て、予告になってないでしょ」

リイナ 「ええええええ！？」

作者 「ほら、具体的に」

リイナ 「ガチホモ、キモオタ、生徒会が二章では登場……！」

鈴 「えと、やっぱり……」

リイナ 「襲われます……！」

作者 「そういうこと、じゃないと楽しくないでしょ？」

鈴 「いえ、ストレスがたまる一方です」

作者 「そ」

リイナ「行っている？行っている？」

作者「行ってよし」

リイナ「じゃ〜ね〜!!」

鈴 「さようなら☆」

社会不敵合者は〈恋〉される。(前書き)

二章目突入です！

文章表現がおかしいところもありますが、これからもよろしくお願いします！！

都合によりガチホモの存在を消去しました。

書いてて寒気がしたので……。

ご了承下さいませ。

社会不敵合者は〈恋〉される。

「好きです、付き合ってください!!! てか嫁になれ!!!」

意味が分からん、さっぱり分からん。

私がいるのは体育館倉庫。

目の前にいる人物から目を逸らそうにも周りには何もない。

現在は体育の授業中だ、もう少し時間を選んでほしかった。

そりゃあ告白されたのは嬉しいよ。

でも相手が男ってのは気に食わない。

お前には女に見えてもな、私の心は男なんだ。

「えと、失礼ですがお名前は？」

「するがゆめじ駿河夢路という」

女子から見れば結構顔も整っていて、性格も良い。

けどな、男に抱かれる趣味はないんだ、生憎な。

「ごめんなさい」

「何で!?!」

彼も告白して一分以内に断られるとは思っていなかったのだろう。

「僕のこと嫌いなのかい？」

「別に嫌いじゃないけど」

「だったら」

「だったらとかそんな理由じゃ付き合いませんし、お嫁になんてなりません！」

その場に崩れ落ちる駿河くん。

いや、すまないね、ほんと。

私は気まずくなってその場を後にした――――。

今週に入って何度目だろうか。

男子にも女子にも告白され続けている。

男子はともかく女子って……。

「モテますね、鈴」

「そっちはどうなんだ、リィナ」

「今週は十人くらいですね」

私たちは転入生として茅ヶ崎湮南のクラスに編入している。

一クラスに二人の転入生という異常さに生徒たちは驚いている。

しかも二人とも美人。

いや、照れるから止めてくれ。

で、美人がいたら若い高校生諸君は何を考えたか男女を問わず告白を開始した。

断って諦めてくれるのは良いんだが、稀にしつこい奴がいる。

「鈴ちゃん」

リイナと一緒に廊下を歩いていた私に声をかける人物。

「や、その声はキモオタ君じゃないか」

「ひ、ひどくない？」

声をかけてきた人物は小拓野姫妹夫。おたくのきもお

名前の通りオタクでキモい人だ。

ちなみに二度とフルネームで呼ぶ気はない。

私服を見た人の話によると脂汗を流して、リュックサックとバン

ダナと眼鏡をして、アニメ物のシャツを着ていたそうだ。

服装はともかく、汗とか眼鏡は体質の問題だろ。

もう存在否定され過ぎてる。

「何かすごく心の中で悪口言ってる？」

「気のせいです☆で、何の用ですか？」

「ちょっと僕のフィギュアになっ————へブッ」

リイナがキモオタの膨らんだ腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。

お気の毒です。

死ぬなよ、キモオタ。

「変な音がしましたが大丈夫でしょう」

「そうだな」

もとより情けをかける心の余裕なんて持ち合わせじゃない。

廊下の壁に叩きつけられた肉塊を放置して、目的の場所に向かうことにした。

〈小生女又会〉

んん？

しょうせいおんなまたかい？

誤字なんてレベルじゃないんじゃないだろうか。

少なくとも〈生徒会〉には見えないんだが。

近くを通った多くの生徒に聞いても、ここだと言う。

まあいいか。

私は変色した木製の扉をノックした。

「入りたまえ」

すごく渋い声がしたよ？

本当に生徒なんだろうか。

室内に入ると豪華な造りをした部屋が目の前に広がる。

窓際にポニーテールで腰に刀を差した男性が立っていた。

うわあ、あなたいつの時代のものの方ですか？

「汝が茅ヶ崎鈴か？」

「え、はい」

「我は神栖稜弥^{かみすりょうや}、校風を乱す汝に処罰を下す」

「呼ばれたと思ったら何なんですか!？」

突然後ろからリィナの悲鳴が聞こえた。

確か副会長だった本好きの根暗少女と書記のオレンジ髪がリィナを捕まえていた。

「抵抗したらあの少女を切る」

「はあああ!？」

急展開だな、おい!

「汝に恋人がついておらぬのが問題なのだ。よって茅ヶ崎鈴争奪戦を開催する!!」

もしかしたら会長は阿呆なのかもしれない。

しかし、それは絶望的な宣告だった。

私が男と?

あああああ!!

な可能性があるのだ。

「すぐにも準備だ! 〈性奴会〉の名にかけて!!」

マジですか、そんな名前なのね。

脱力した私はその場にへたり込んだ――。

社会不敵合者は〈恋〉される。（後書き）

作者「基本的に君はこういう役だから♪」

鈴「まあ予想はしてたよ？どうなるんだ私」

リイナ「あれ？もう俺とか言わないんですか？」

鈴「もう諦めた」

霞「次話が楽しみやわ」

鈴「どこから湧いて出てきた!？」

霞「次話の準備に来たんや」

鈴「準備？」

霞「まあ秘密やけど」

リイナ「ていうか私手錠的なもの付けられてるんですけど」

作者「話が終わるから取っちゃ駄目」

リイナ「え」

作者「ちなみにキモオタ君の姫妹夫って姫と妹が好きになって意味付けたんだ」

鈴 「どうでもいい」

霞 「吐き気がする」

リイナ 「喋るな」

作 者 「だそうだ。次も出るのに」

リイナ 「次回予告です」

霞 「何か景品扱いの鈴！」

リイナ 「我が物にしようと群がる男女問わないケダモノたち!!」

鈴 「この学校は変態ばっか!？」

霞 「〈鬼〉も動き始めるみたいや！」

小拓野 「次回も見ろんだゾ☆」

リイナ 「死ねえ!!」

霞 「キモいわ!!」

作 者 「ではこの辺で♪」

鈴 「ま、またね☆」

変態戦争と〈獣〉たち。〈開幕〉（前書き）

すいません!!

都合によりケータイでの投稿です。

いつもと違う点があると思いますがどうかご容赦下さい!!

いつか修正すると思いますので。

また予定ずれて霞さん登場しないんだよなあ。

前話の後書きで準備とか言ってたのに……。

それでは本日も駄文をお楽しみ頂けたら幸いです。

変態戦争と〈獣〉たち。〈開幕〉

「性奴会条項！我が校の生徒は全て従順な奴隷であり、イベントなど楽しいものには参加する義務を負う！！」

んな馬鹿な……というわけで何か始まってしまった。

私が現在いる及び拘束されているのは無駄にだだっ広い講堂前方ステージ上。

阿呆なもののが権限とかコネとか使って午後の授業を消し飛ばした。

で、何をするかというと。

「茅ヶ崎鈴が欲しい者はこれからあるイベントに参加するがいい。なんと相手を思い通りにするラブポジションまで付けてやろう」

呆れてものも言えないよ、何のセールスだ、お前。

宙ぶらりんにされた私を神栖会長は蹴って回した。

うわあ、景色が回る回る。

「「「うおおおお！！」」」

え、何でそんなに皆さん乗り気でいらっしゃるんですか！？

はて、私は腰の辺りで縛られ横向きになっている。

服装は男子ではなく女子の制服だ。

つまりスカート。

え、回されると当然遠心力が働くわけだから裾が……。

ちなみに私が穿いているのは男物の下着じゃなく、女物の方であるからして。

「ここ、殺す！お前絶対にいつか殺してやるう！！」

「「白おおお！！」」

「いやあ、皆やる気が十分で結構だ、あっはっは！！」

「写メんな変態どもおお！！」

赤面しているであろう私は叫びをあげた。

その後の必死な抗議により、私は椅子に縛られることになった。

もうお婿に……お嫁（？）に行けない。

「鈴、グッジョブ！！」

リイナ、お前さえ捕まらなければ、私はこんな生き恥なんて。

あ、そうか。

会長がどれ程の刀の使い手なのかは知らないが、刀を無くせばいいのか。

「茅ヶ崎よ、妙なことを考えると我の仕掛けたトラップなどが作動するからな？」

「ぬ、抜け目ないですね」

あるかどうか分からない不確かなものは消せない。

それはそうだ、思うにも対象を知らないのだから。

また振り出しに戻った。

どうやって逃げようか。

私だけなら逃げることは可能だろうがリイナが残ってしまう。

怒ったもののふが何をするかなんて考えたくない。

リイナと私を瞬間移動させる？

無理だろ、マジックショーじゃないんだ。

どうやって誤魔化せばいい。

「そういじけるでない。イベントは楽しまなければ、茅ヶ崎」

誰のせいだと思ってるんだ、誰の。

人の恋人決めちゃおうみたいな意味の分からんイベント誰が喜ぶもんか。

喜ぶ奴がいるなら出てこい、今すぐスカート穿かせて吊ってから回してやる。

「さて諸君、分かっていると思うがこの人数だ。予選でもしてもらおうか」

真剣に話を聞く馬鹿たちには目が血走っている者までいる。

何気に女子も混ざっていることに驚きを感じるね。

いったい私をどんな目にあわせる気なんだ。

頼むから私に変な想像をさせないでくれ。

「予選はジャンケンを行う!!」

「は？」

すまない、何だって？

このもののふはジャンケンと言ったのか？

その場にいる生徒全員の頭に？が浮かんでいる。

私を賭けておいてジャンケン。

私の価値ってそんなものなのかなあ。

あれ、おかしいな、目から汗が出てくるよ。

これじゃあどんな変態に私が渡ってしまうか分かったもんじゃない。

「私って……私って……」

それから私は初めて自分の存在価値について悩み続けた――。

変態戦争と〈獣〉たち。〈開幕〉（後書き）

霞 「あたしってそんなに影薄いんやろうか……」

作 者「いえ、純粹にずれてしまっただけです!」

リイナ「そうですね、決して忘れていた訳ではないそうです」

鈴 「（絶対に忘れてたな）」

作 者「今日は時間も無いので早く次回予告をしましょう!」

リイナ「鬼も出なかったことですし、もう下手に予告しない方が良いと思います」

鈴 「ですね」

霞 「バッチリ見たで!! 白のパーーー」

鈴 「死ねえええ!!」

霞 「あたしの携帯があああ!!」

リイナ「後でパソコンの方から写メ送ってもらえます?」

霞 「オーケーや、もう広げたる」

鈴 「止めてくれ!!」

小拓野「僕にも！」

全 員「黙れ、キモオタ!!」

(可能な限りの残虐行為中)

作 者「ちょっと残念ですけどまた今度です」

鈴 「バイバイ☆」

リイナ「さよなら」

霞 「ほなまたな♪」

変態戦争と〈獣〉たち。く予選く（前書き）

引き続き携帯での投稿となっております故、読みづらいところも多々あると思います。

ほんとにスイマセン。

下書き無しで書いたから誤字脱字あれば報告よろしくお願いします。

それでは今日も駄文をお楽しみください。

変態戦争と〈獣〉たち。く予選く

そうして始まってしまった私の争奪戦。

そんなに張り切らなくたって、私はあなたたちのものになる気はありませんから。

どうしてそんなに気合い十分なのかなあ……。

それにしても何なんだ、この妙に重苦しい空気。

「何でジャンケンなんかで予選をするんですか？」

近くで偉そうに腕を組んでジャンケンを見物する神栖会長に話しかけてみた。

「ふむ、知りたいか？」

そりゃあ知りたいでしょう、こんなもので人の将来の相手決めるなんてそれなりの理由があるんでしょうね。

「ジャンケンとはな、古来より伝わる正々堂々とした競技なのだ！
」

「やっぱり阿呆だったんですね、会長」

ですよね、だってあなたもののふですものね。

ええ、予想してましたとも。

大体何なんですか、あなたのその無駄に武士っぽいところ。

「由緒正しき武士の血を引く神栖家の長男を愚弄するか」

「え、聞こえました？」

「いや、何となく馬鹿にされた気がしてな」

間抜けの集団に顔を向けると半分以上が脱落したようだ。

ジャンケンぐらいで何をマジになってるんだ。

「最初はグー、ジャンケン、ポン！！」

「あああああ！！」

「やった、鈴ちゃん待っててね」

運の悪いことにキモオタも勝ち上がっているようだ。

他にも霞や駿河くん、何気に雛宮さんも参加している。

あ、雛宮さんなら良いかも。

多分ひどいことしないと思う。

ああ、そうだった。

どうやって脱出するか考えていよう。

私はとりあえず誰にも疑われずにリィナと二人でこの場から逃げ出す方法を考えることにした――。

待つこと三十分。

「というわけに残ったのはこれだけか」

会場には静寂が訪れた。

負けてしまった生徒たちな鎮圧にかなりの時間がかかったのだ。

霞、雛宮さん、駿河くん到他数名……とキモオタ。

「いやあ、皆よくやった。正々堂々とな」

不適に笑む会長は嬉しそうに言った。

武士が悪代官みたいに笑っているのか。

「純粹に運だけで勝ち残っている者もおろうが、ジャンケンとは動体視力と反射神経を試す競技。強者の気を数名に感じるぞ」

え、そんなことしてたの？

「鈴ちゃ〜ん♪もうすぐだからね〜」

キモオタは違うな、断言出来る。

たいして気なんて感じることもないんだが。

だってまだ嫌らしい目線の方が多く感じるんだもん。

あ、勿論駿河くんのように純粹に私のことを思ってくれている人もいる。

そう思いたい。

「して次の種目だが、正直考えてなかったからトーナメントでもやろうと思う」

「死ねばいいのに……」

「茅ヶ崎、何か言ったか？」

「気のせいじゃないですか？」

「なんや、おもしろなってきたな、千代」

「でもトーナメントって女子には不利じゃないんですか？」

雛宮さんが不満の声をあげると他の女子たちも文句を言った。

「心配いらん、種目内容は毎回くじ引きで決める」

何も考えてないにしては準備ができすぎているのだが。

まあ、雛宮さんが傷付かないのなら良しとしよう。

「鈴、誰が勝っても渡しませんから安心してください!!」

「余計に心配だわ!!」

「えー、というわけで帰っていいぞ敗者諸君」

ひ、ひどい仕打ちだと思う。

しかし、鎮圧方法が描写出来ないほど過激なものだったのでうまく言えないが文句一つ無かった……同情するよ。

「うわ、誰もいないですね」

人のいなくなった講堂、後には私たちしか残っていない。

「さて、一回戦を始めようか……とその前に」

「その前に？」

「茅ヶ崎のスリーサイズとか肌着の色を公開しまーー」

「させるかあああ!!」

何でお前が知ってんだ!?

いつの間にそんなもの調べた。

うう、嫌いだ。

皆嫌いだ、プライバシー漏洩したら警察のお世話になるんだぞ。

「生で見たい人？」

「は？何をだよ」

全員一致で賛成。

ちょ、雛宮さんや駿河くんまで！？

良い人だと思ってたのに！

この後は……脱がされました。

縄で縛られたまま。

完全な犯罪現場だったことは言うまでもない――。

変態戦争と〈獣〉たち。く予選く（後書き）

鈴 「訴えてやるう!!」

リイナ 「どうぞご自由に」

鈴 「え、止めないの？」

神 栖 「無理だからな、文章である我らには」

鈴 「変態会長は消えて下さい!!」

霞 「白も良いと思うで？清楚で」

鈴 「ひどいよう、変態だらけだよ」

作 者 「良いんじゃない？楽しげで」

鈴 「私いつか陵辱されるんじゃないかと怖いんです」

リイナ 「大丈夫ですって、そんなことしたら小説がデリートされま
すから」

作 者 「可能な限りトライしてみる」

神 栖 「そろそろ次回予告をせい」

霞 「次は一回戦って言っとけばええやろ」

リイナ「正直デート編かそれ以上になりそうです」

作者「タイトル考えるの面倒だぁぁあ!！」

神栖「作者がこんな調子だからな、許してやってくれ」

鈴「何としてでもキモオタだけは勝ってはいけない」

霞「あたしが殺る予定やけん、大丈夫やで」

リイナ「それではまた今度!！」

神栖「また会おう」

小拓野「白おおお!！」

鈴「くたばれえええ!！」

霞「……ほなまたな☆」

変態戦争と〈獣〉たち。ゝSゝ（前書き）

あんまりおもしろくなくなって逝ってます。

二日に一回更新に戻して少し考えたいです。

どうかご容赦ください。

では〈超〉駄文をお楽しみください……。。

変態戦争と〈獣〉たち。くSく

「うう……ううううう」

しばしの嗚咽を漏らす私は学習した。

何をもって？

世の中にはケダモノと良い人の皮を被ったケダモノしかいないってことをだよっ！！

何さ、よってたかって私に嫌らしいことをして。

変な気持ちになるんだぞ。

ち、畜生め！！

お前たちなんて人じゃないんだろう？

「いやあ、俄然ヤル気が出てきたわ」

え、やる気じゃなくてヤル気ですか？

「霞、正直引かれるから止めた方が良いと思うよ？」

「キャー！！鈴ちゃんが惹かれるって言うてくれたわ！！！」

「誤字変換！！」

「ほら千代も頑張って勝たなきゃ」

「多分勝てないと思うよ？」

是非勝ってもらいたい、変態たちしかいないのが理解できた。

「僕が勝つからねえ？」

黙れ、キモオタ。

背筋に悪寒が走るわっ！！

「では次は茅ヶ崎の裸体を――」

「それは絶対に拒否する！！」

「そうです、これから先は勝者にのみ与えられる嗜好です」

何を真面目に言ってくれてるのかな、駿河くん。

「あなたは真面目な人だと思ってたのに……」

「アレで理性を崩さない方がすごいと思います」

リイナ、お前なんてよだれ垂らして食い入るように私のこと見てたもんな。

「えー、ではそろそろ一回戦を始めようか」

「そうです、さっさとこんな馬鹿なこと終わらせましょう！！」

珍しい、リィナと意見が合―――。

「鈴は霞と私だけのものです!!」

―――ってなかったようだ。

根暗少女とオレンジがクイズ番組で見ると中身の見えない箱を二つ持ってきた。

それを確かめると会長が口を開いた。

「それでは一回戦を開始する!」

騒いでいた他の生徒を含め、喋る者はいなくなった。

これからどんなことを行うか全く想像の出来ない私にはこの静けさは恐怖を煽るだけでしかない。

「ルールは簡単だ。くじ引きで対戦相手と種目を決め、競ってもらう」

片方の箱から二つの球を取り出し、もう片方から一枚のプレートを取り出された。

「西原霞、小拓野姫妹夫、種目は叩いて被ってジャンケンポン!!」

「またかよ、ジャンケン多いな、おい!!」

「愛する鈴ちゃんをこの手に!!」

「虐待のお時間やで!!」

用意されたヘルメットとハリセンを手に取り構える両者。

そして一回戦が始まった。

「最初はグー、ジャンケン、ポン!!」

勢い良く出された太くてテカテカ光っている手はグーを。

細く綺麗に整えられた爪をした手はパーを出していた。

先に動いたのはキモオタ、ヘルメットを深々と被り込む。

「よし、セーフ……ヘブツ!？」

「関係あるかああ!!」

ハリセンを掴み、霞はそのままキモオタのキモい顔に叩き込んだ。

無防備になっていたキモオタの顔が更にキモく歪み、重力を感じさせない程のスピードでそのデカイ図体が飛んでいく。

ああ、とても清々しい気分だ。

「ちょ、反則でしょ!？」

「なるほど、被ったからといって叩いてはいけないというルールは無いな、続ける」

「さすが会長話が分かる♪」

うめくキモオタに歩み寄り、再びジャンケンをしようとする霞。

「ジャンケンなんてするもんか!!」

恐怖を植え付けられたキモオタはジャンケンを必死に拒絶するが、霞は容赦なくくらいにハリセンを叩き込んだ。

「ヒデブウウ!!」

床を転げ回るキモオタ。

「不戦勝やもんな、もう一度や」

Sだ、ドS様が降臨なさったぞ。

「分かった、やるから……」

「分かればいいんや、分かれば」

「「ジャンケン、ポン!!」」

キモオタが霞に勝った。

「もらったああ……へブツ!」

再度キモオタは吹っ飛ばされた。

「何で!」

防御する側である霞があらうことかヘルメットでキモオタを殴り付けたのだ。

「ヘルメットで攻撃しては？」

「かまわないぞ」

「ルールに無ければ何でも良いのかあああ！！！」

嘆きをあげる豚。

お疲れさまでした、君のことは一秒でも早く忘れることにするよ。

それから真ん丸い肉塊はしばらく床やら壁やらに叩き付けられ続けた――。

変態戦争と〈獣〉たち。くSく（後書き）

霞 「これでアイツの出番は無くなったわ」

リイナ 「ですな」

鈴 「英雄だ（ドS様だ）！！」

作者 「可愛そう……豚君」

霞 「とっとと次回予告やで」

リイナ 「はい♪次は鈴を襲いまくる話です」

鈴 「止めてよう！！」

リイナ 「もうほんとに女の子ですね」

霞 「ああ、ほんとにかわいいわ」

鈴 「ちょ、照れるから止めろって」

リイナ 「心まで女の子になって、襲いがいがありますね」

霞 「次はどうやって襲ったるか」

作者 「縛れば？」

鈴 「変態めく……」

リイナ「そうですよ、私たちの作者ですもん」

霞「諦めや〜」

鈴「ううううう…」

作者「それではそろそろ」

リイナ「次も見てくださいね☆」

霞「ほな♪」

鈴「恥ずかしいから見ないでえええ!!」

変態戦争と〈獣〉たち。く悪徳の武士く（前書き）

読者が段々と増えてきて感謝感激です!!

いつまで続くか分かりませんがこれからもよろしく願いします!!

ではでは駄文をお楽しみ下さいませ。

変態戦争と〈獣〉たち。く悪徳の武士く

「で何やってるんだ？霞」

「いやちよつとご褒美のチューをな♪」

キモオタを虐め終えた霞が椅子に縛られた私のひざに乗って顔を寄せてきた。

運動をしたからか肌に汗が浮かんでいて、妙に艶やかな雰囲気を漂わせている。

熱を帯びた温かな吐息が頬に吹きかけられる。

何というか大変色っぽい。

「た、助けて」

「さて、次の試合に入るぞ」

酷すぎる仕打ち……華麗に会長に無視された。

こうしてる間にも霞は避けようとする私の顔に迫ってくる。

あ、今度こそ駄目のようだ。

そうだ、リィナは？

そう思いリィナのいる場所を向いた。

あれ、いないぞ？

どこに行ったんだろうか。

根暗少女とオレンジも消えていた……。

「観念しい」

「いえ、まだ早いというか、何というかですね」

今はそんなことを考えている場合ではない。

頭を両手で押さえられていよいよ危なくなってきた。

「こ、心の準備が。そうだ、霞、こういうときって目を閉じるよね
!？」

「ん、それもそうやな。じゃあこれで良いん？」

言った通り目を閉じる霞。

鈍い音が響き、床に顔から突っ込んでしまった。

足も手も封じられた今私ができること。

そう、頭突きに他ならない。

痛い、頭のとっぺんと擦りむいたあごが特に。

「いったあああ!!」

かなりの痛みに床で悶絶する霞は手で額を押さえ足をバタバタとしている。

これで当分の危機は去ったようだ。

「駿河夢路、我、種目はあっち向いてホイ」

ん、何て言ったんだ？

我とか言ったような気がしたのだが。

「何を不思議そうにしておる、我也参加していたぞ？」

「嘘だっ!!」

だって私の前にずっといたじゃないか。

「誰がジャンケンしなかったら負けと言ったのだ？ 言ったであろう、正々堂々とな」

「思いつきりセコいでしょ!!」

「ルールに背いていなければ反則ではない」

確かにそうですけど、地道に頑張っていた生徒たちは何だったんだ……。

「目的を果たすためならば、考えうる限り全ての方法を行う、それ

が武士!!」

「どっちかって言えば、あなたは悪代官の方がお似合いですね!？」
というよりはジャンケンから離れる気は無いのだろうか。

「勝負は十回、ルールは分かるだろう?」

「ええ、分かります」

目付きが変わり、別人のようになる駿河くんは会長を睨み付ける。

それを含み笑いで返すもののふは何とも楽しそうに駿河くんに歩み寄った。

うわ、絶対に何か企んでるって。

「先に言っておきますけど、顔面を殴りつけたり武力行使をしたりするのは無しですよ?」

「ちっ」

やっぱりやるつもりだったのか、頭良いね、駿河くん。

「では始めようか、ただやるのも面白くない、一度だ、一度我に勝つことが出来れば汝の勝ちでしょう」

「阿呆だ、阿呆が現れたぞおお!!」

力一杯叫んだね、会長なんて負けてしまえ。

「「最初はグー、ジャンケン、ポン!!」」

駿河くんの勝利、よしやってしまえ。

「あっち向いてー」

「あ、茅ヶ崎の下着が見える！」

「「ええっ!?!」」

私自身驚いたね、駿河くんと私の声とが重なった。

少しだけ開いていたさつと足を閉じる。

こら、残念そうな顔をしない。

またジャンケンをする両者。

駿河くんがものすごくこちらを気にしている。

会長がジャンケンを勝った。

「あっち向いて、あ、茅ヶ崎が足を広げてる!!」

嘘だと思っいても本当かもしれないという疑心に取り立てられる
駿河くん。

「ホイ!!」

そりゃあ、こっち向きますよねえ。

男の子だもん、分からないこともないよ。

「まずは一勝、あと九勝」

「ひ、卑怯だ!」

「どこがだ?」

得意そうに嘲笑する会長は見下すような目でそう言った。

「それは……」

「汝が嫌らしいだけだろう」

「うぐ」

これは精神的に痛いです。誠実に生きてきた駿河くんには耐えられない屈辱。

その後がどうなったのかは言うまでもない。

駿河くんの心がパンクして試合中は上の空になってしまっていた。

結局駿河くんは一度も会長に勝つことは出来なかった――。

変態戦争と〈獣〉たち。く悪徳の武士く（後書き）

鈴 「駿河くん可愛そう……」

霞 「そういう役も必要やろ、キモオタと違ってまだ未来があって良いやん」

作者 「そうそう」

鈴 「今回はリィナがないから次回予告やって終わりです」

霞 「まあそう言わんとき、準決勝の種目？その内容を読者からリクエストして貰いたいんやけど、誰か良いアイディア持つとらんかいな？」

鈴 「なあに、また詰まったの？」

霞 「読者の求める作品にしたいらしいえ」

作者 「そゆこと」

鈴 「私は出来るだけエロくないのが良いんだけど……」

霞 「駄目や」

鈴 「ですよね」

作者 「もう次回予告しなくて良いと思う」

霞 「あえて言うならいつも通りに鈴ちゃんが襲われてー
ー」

鈴 「もう良いです……」

作 者 「じゃあそろそろ」

霞 「サイナラや♪」

鈴 「また今度☆」

変態戦争と〈獣〉たち。く着せ替え人形く（前書き）

今回は初めに少しだけリイナの視点から入ります。

リイナも鈴も一人称が私なので場面が変わるとき分かりにくかったらスミマセン。

準決勝の種目まだまだ募集中です。

それではお楽しみ下さいませく。

変態戦争と〈獣〉たち。く着せ替え人形く

「んふふ、私と少人数になったのが間違いでしたね」

私は目の前に横たわる二人の人物に話しかけた。

だが二人には聞こえていないようだった。

「そんなに気持ち良かったんですかね？」

一人は本を抱えた内気そうな眼鏡をした少女、もう一人はオレンジ色の髪をしてショートヘアをしたつり目の少女だ。

二人とも半裸にされて力無く呆けている。

何をしたのかって？

キャフっただけです。

ちょっぴりハードにね♪

ごちそうさまでした☆

「さてと、どうするかな？」

このまま鈴を助けても良いし、遠くから眺めていても良い。

え、今どこにいるのか描写が欠けている？

女子トイレ前廊下。

大体ベタだがトイレに行きたいと言うと、あっさり行かせてくれた。二人もこんなことになるなんて全く予測できなかっただろうね。

そうだ、透明になってイタズラしちゃうか。

鈴の胸を揉みまくるんだ、うわ、興奮してきた。

早速実行に移すため私はスキップで講堂へと向かったーーーー。

「ん、急に寒気が」

こういうのって結構当たるんだよなあ、嫌だな。

「それでは次の二人は……」

もののふが次々に選手と種目を決めては生徒たちの人数を減らして行く。

駿河くん、修行だとか言って走って帰っちゃったし、もうまともな人はこの場にいらなくなっちゃった。

これはマズイ、大変マズイ事態だ。

何故か言う必要は無いだろう、変態たちの暴挙を止める人物がいないのだ。

実際は私が肌着を脱がされようとしたとき止めてくれたのは駿河く

んのみなのだ。

つまり、駿河くんがいなくなった今、私を守ってくれる最大の盾は消えてしまったということ。

「リ〜ン〜チャ〜ン？」

「ヒッ！！寄るなケダモノ！！」

霞が腫れた額をで急に起き上がったもんだから、かなり驚いた。

「あたしはSでもMでもいいけるんや、さあもっとしてや！！」

「普通に気持ち悪いわ！あっち行け！！」

そう言ってかろうじて動かせる足で蹴りを入れる。

「あふっ」

へ、変な声を出すなよお！！

「白色って萌えーーー」

「死ねっ！」

スカートの中身見ないでよ、恥ずかしすぎる。

なのに全校生徒前で晒されたり、肌着になるまで剥かれたり……。

「大人の階段のーぼるー、君はまだーシンデレラっさー♪」

「登りたくないから遠慮します!! 何でそんな古い曲知ってんですか!？」

「教養」

「どこら辺が!？」

「大人社会の勉強」

な、何も言い返せない。

困っているところに会長が偉そうに歩いてきた。

「茅ヶ崎よ、二回戦を始めるぞ。体操服でも着るが良い」

「何でそうなるんですかっ!？」

「何だスク水が良いのか？」

「そういう問題じゃないんです!!」

少し考えて会長は困ったように口を開いた。

「それは残念だ。それでは茅ヶ崎を全裸にするしか勝者は満足してくれないのだが……」

「満足してくれなくて結構です!」

会長の後ろには十人程度の男女生徒が立っている。

何気に雛宮さんが残っているようだ。

良かった、まだ常識のある人がいてくれた。

「雛宮さん、勝ち残ったんだ」

「うん、私運が良いみたい」

「でもこんなものに参加して楽しいの？」

「全ては鈴ちゃんを手に入れるため！！」

「はい？」

何だかとても聞こえてはいけない言葉が雛宮さんの口から出てきた気がする。

自分の世界に入り始めた彼女は頬に手を当てて悶えだした。

「あたしが鈴ちゃんのマネキンが手に入るって言ったら、もうあんな感じや」

「余計なことを吹き込むんじゃない！！」

妄想の中では私が剥かれては着せられているに違いない。

「こうすると千代は無敵に近い強運と身体強化が身に付くんや、あたしがマジにならんと止まらん」

マジって、あの銃を使ったとき？

かなり心配になってきたな、私はもう誰かに襲われることが確定したようだ。

「私はもう家具じゃないんだ！！」

「パクってないでさっさと着替えんか、茅ヶ崎」

「着替えろって、この状態で？」

後ろで縄に縛られた両腕を上下に振ってみる。

「その状態でだ」

「無理に決まってるでしょうが！！」

「私に着替えさせて下さい！」

勢い良く手を上げる雛宮さん。

あの、お気持ちだけで結構なんです、ほんとに、心から。

「ふむ、さすがに我がやるのは倫理的によろしくないな、頼めるか？」

「喜んで♪」

雛宮さんに椅子から立たされてトイレに連れていかれる。

ちょ、力強くないですか？

ズルズルと引きずられて私は少しだけ安心した。

ケダモノたちに肌を晒さないで済んだのだから当然だろう。

ああ、これから私どうされるんだろう。

妙な脱力感に襲われて私は思考を放棄することにした――。

変態戦争と〈獣〉たち。く着せ替え人形く（後書き）

雛 宮「というわけでまたこのコーナーです！」

霞 「初登場の千代に拍手く！！」

作 者「結構話に出てきてたのになかなか出せなくてスイマセン」

鈴 「……………」

霞 「ん、どしたん？」

作 者「いつもは無理にテンション上げて接してたからね」

霞 「緊張して固まっとんのか」

雛 宮「鈴ちゃん？」

鈴 「ふ、ふあい！！」

霞 「メッさ可愛くない！？悶え殺す気かいな」

作 者「誰に対してもこんなだったら良いのにね」

雛 宮「可っ愛いく♪」

（鈴を縫いぐるみのように抱き締める）

霞 「あ、意識飛んだ」

小拓野「チャンス!!」

ズドンッ!!

(かつては生き物だったかも知れない肉塊はその場で崩れ落ちた)

小拓野「く、黒おおお……」

霞「這いつくばってでもスカート覗くんかい!!」

雛宮「最低」

作者「ドンマイ」

霞「よし、次回予告や」

雛宮「バトルロワイヤル!!」

霞「妙な鬼も登場して大変な二回戦」

雛宮「種目は？」

作者「決めてるわけない」

霞「阿呆」

鈴「リイナはどこに行ったんだ？」

雛宮「あ、起きたんだね」

霞 「次話に帰って来るらしいえ？」

作 者「楽しみだなあ♪（ひどくニヤニヤしながら）」

鈴 「嫌な予感しかしないんですけど!？」

雛 宮「それではお楽しみに☆」

霞 「またな？」

鈴 「うう、もう虐めないでよう」

動き出す〈悪〉夢。(前書き)

やっぱり予告やったところでうまく書けないです、はい。

皆さん覚えてますか？

デート編の最後で言ってた〈パニック〉と〈トレース〉ってのがそろそろ出てきます。

それでは駄文を楽しんでくれる読者様、今日も作者は感謝です。

どうかお楽しみ下さいませ。

動き出す〈悪〉夢。

「はい、ヌギヌギしましょうね♪」

は、恥ずかしすぎる。

まるで赤ん坊を扱うかのように話しかける雛宮さん、これはこれで拷問だ。

そして何より、む、胸が当たる……。

体つきが良い雛宮さんの胸が私の体に当たってひしゃげる。

り、理性が、理性があああ！！

スカートを脱がされる恥じらいと好きな人が近くにいるという意識も加わり、おかしくなりそうだ。

ああああああ！！

ふう、落ち着いた。

発狂したら終わりだ、リィナと同じになってしまう。

ヘタしたらサイレンがやって来るかも知れない。

まだこの歳で刑務所は行きたくない。

法律とか気にしてたらキャラクターのほとんどが捕まってしまうだ

ろう。

うわ、犯罪者バンザイ!!

「あ……」

「どうしたの？雛宮さん」

「服が……手のところで引っ掛かった」

……………何ですと!?

「ふおっ!」

た、確かに取れない。

し、下だけ体操服、しかもブルマ!?

イ、イタイ……色々イタイ。

変態はリイナたちだけにしてほしい。

「私はジャンクじゃない!!」

「パクってる時点で壊れてると思いますよ」

うーん、どうしようか。

服を破る？

論外だ、何か嫌だ。

このままってのも会長が許さないだろうしなあ。

結論的にどうしたって襲われないか？

「よし」

「え、何がよしなんですか？ 雛宮さん」

「私が服をアレンジするね♪」

そんなに嬉しそうに言われましても、ちょっと困るんですけど。

任して良いんだろうか……。。

直後に雛宮さんはどこから出したのか、裁ち鋏を使い、私の制服を切り裂いた。

私？

悲鳴を上げて、ただ何をされるのかと震えてましたー！ー！。

「ムムム、百合の匂いがするのです」

「それでは二回戦を始める！！種目はグリコ！！ここから屋上までを往復してもらう」

「グリコって何ですか？」

「グリコとはジャンケンをし、グーで勝てばグリコ、チョキならば
チョコレート、パーであるならパイナップルと文字数の分歩いて行
く種目なのだ」

さて、遊んでいるもののふは無視して鈴を探そう。

私は講堂をグルリと見回した。

本当に何もない殺風景な景色。

あゝトイレから千代さんと一緒に出てきたのは鈴だ。

どこかで見たことのある服装をしている。

あ、あれはメイド服ではないだろうか。

も、も、萌える！！

わざと短くされたスカートの裾を必死に伸ばそうと引っ張る鈴。

駄目だ、我慢できない。

私は鈴に向けて走り出した――。

「ひゃあああ！！」

何かと思えばスカートが何者かにめくられた。

くぐもった声とボタボタと床に落ちている血。

見えない何かがそこにいる。

その空間に蹴りを入れるが空振りした。

「うひゃあああ!!」

突然胸が変な形に歪み、何度も弧を描く。

ななな、何なんだ!?

透明人間でもいるのだろうか。

あうあう、ち、力が抜ける。

こんなことをするのは……。

「リィナ! 止めろ!!」

「やです」

「やじゃないんだ、こんなことしたら私たち削除される!!」

すると何もない空間からあの銀髪が出てきた。

「我が生涯に一片も悔い無し、本望です!!」

「消えたくないいい!!」

「おお、茅ヶ崎。着替えたのか」

話しかけてきたのは会ちよ……雛宮さんだった。

「ど、どうしたの？雛宮さん」

「雛宮？我は神栖稜弥だが、顔を忘れたのか？」

いえ、平然と胸を張って言われましても、あなた雛宮さんですって。

「む、紐がほどけたのか？」

目に掛かる髪を手で払い、あると思っているポニーテールを掴もうとして何かを察した。

「無い……少し失礼する」

そう言ってトイレに向かう会長（？）は男子トイレに入った。

しばらくして出てきた会長は叫んだ。

「何だこれはあああ！！」

さすがに会長でも驚きますよねー、私だって初めて女になったときは驚きました。

「えと、あなた会長ですよね？」

「その通りだ」

つまり、雛宮さんに会長が入っているようだ。

じゃあ雛宮さんはどこに？

「鈴ちゃん、どうしたの？」

そ、その声はキモオタ。

「くたばれ!!」

「きゃっ!!」

私の跳び蹴りはキモオタの豊満な肉にめり込んだ。

もちろん気絶させておく。

「鈴ちゃん、どうしたの？」

「死n……アレ？会長、いつからそんな口調になったんですか？」

「我はここにいるぞ」

そうだった、あなたはそこにいたんですね。

じゃあこいつは雛宮さん？

「ちょっと名乗ってくれる？」

「僕は小「もういい」ひどい！」
こいつはキモオタだ。

じゃあさっきのキモオタは誰だ。

そうだ、霞に違いない、いや、そうであってほしい。

「何や？」

「お前はそのままかよ！」

認めたくないがこれで決まった。

キモオタの中身は雛宮さんだったのだ――。――。

動き出す〈悪〉夢。(後書き)

リイナ「たっだいま〜♪」

霞「おっかえり〜☆」

鈴「死ねばいいのに……」

神 栖「茅ヶ崎よ、汝はこんなに不幸だったのだな」

小拓野「容姿と喋り方のギャップが萌え……ぐふえ」

(神栖がキモオタを殴り飛ばす)

作者「お〜飛ぶ飛ぶ」

リイナ「また変な展開ですね」

霞「ホント襲いがあって良いわあ」

鈴「会長、ちょっとあの変態たちをどうにかして下さい」

神 栖「よし」

霞「お、やるんか？」

神 栖「我が身を守るためだ」

リイナ「うわあ、どこかに行っちゃった……」

鈴 「いい、ほっとけ」

作 者「守る気無いけど、懲りずに次回予告」

リイナ「何故か入れ替わる人格！」

鈴 「そこに加わる妙なトラブル!!」

作 者「鈴の未来はどっちだ!!」

鈴 「知るかつ!!」

リイナ「あつ、メールだ。何々？ 武士は落とした、写メ送るで♪だ
って」

鈴 「会長おおお!!」

グリコの玩具は子供に〈好〉かれる。（前書き）

何だか自分でも何なんだこの小説と思います。

ホント何がしたいんだ、自分。

テスト前だから更新が不定期になることをお許し頂きたいです。

では今日も駄文をどうぞお読みください。

グリコの玩具は子供に〈好〉かれる。

「ものすごい勢いで鈴ちゃんに蹴られたんだけどなあ」

「だから何度もゴメンって言ってるんです!!」

むう、キモオタの顔がすねても、ただ気持ち悪いだけなのだが、さすがにそれは言っではいけない。

たとえば本当に気持ち悪くても中身は雛宮さんなのだ。

「今はそれどころじゃないんでしょ？」

「そうだった」

前回の話を整理するところなるようだ。

雛宮さん↓キモオタ

キモオタ↓神栖会長

神栖会長↓雛宮さん

の以上三名がループしている。

もちろん全校生徒入れ替わっているようだ。

トイレが一番危険な状況になっている。

何故か言うまで私は親切ではないが分かるでしょ？

そう、あそこは危険区域だ。

二回戦？

そのまま続行中ですが、皆で。

私が勝てば私を手に入れるのは私だ。

頭良い、私。

「ジャンケン、ポン！！」

相手は雛宮さんイン神栖会長だ。

「何でそんなに弱いんですか！？」

そう、あんなにジャンケンの種目をやるわりには会長、弱すぎる。

「この体がイカンのだ！反応が遅すぎる！！普段から鍛えておらんのか！？」

「えー、そんな必要ないと思います。足だってクラスで五本の指に入るんですよ？」

「これだから女子は……」

好き放題に言ってるな。

「霞に鍛えてもらうように言いましょうか？」

ビクリと体のこわばらせる会長、ホント何されたんだろう。

「結構だ!!」

うわ、キモオタが言ってたように、確かにギャップが萌える。

え、いや、別に襲いはしませんよ？

「何で会長距離を取るんですか!？」

涙目で上目遣いに睨み付ける会長。

「邪気を感じる……」

「ああもう、武士は泣かないでしょ」

「それもそうだな」

目尻に浮かんだ涙を拭うと笑った。

「ありがとう」

「え、何ですか？」

「いや、何でもない」

中身って会長だよな、妙にドキドキするのは外見が雛宮さんだからと信じたい。

そう思いながら私は胸に手を当てた――。

「ヒヒヒ、皆馬鹿だな、〈^{トレース}転換〉」

「……油断するなど言ってるでしょ、〈^{パニック}混乱〉」

「分かってるって、前回の小型どもは能が足りなかったんだよ」

屋上にいたのは根暗少女とオレンジ髪だった。

ただ様子がいつもと違うようだ。

「星の力を持つ俺たちには奴等の攻撃は効かない」

「それを油断と言うのを知らないの？」

「お前が守ってくれるじゃん」

「はあ……」

頭を押さえた根暗少女こと〈^{トレース}転換〉は溜め息を吐く。

オレンジ髪の〈^{パニック}混乱〉はただただ不思議そうに〈^{トレース}転換〉を眺めているだけだった――。

「眠いよお、お姉ちゃん、おんぶして〜？」

「誰だお前？」

雛宮さん及び神栖会長と折り返し地点である屋上に向かう途中、小さな幼女が現れた。

コマンド

戦う

防御

道具

逃げる

おんぶする

お菓子を与えてみる

愛でる

愛でる

愛でる

いかん、欲望が出た。

「ち、茅ヶ崎……別に愛でるのは構わんが、その子は校長だぞ」

「ふえ！？この子校長なの！？君、歳は？」

「〇〇歳だよ？」

「表示出来ないほど歳いつてる!!」

黒髪でいかにも誰かの妹ですというようなツインテール。

イ、イメージが壊れてしまうじゃないか。

そうか、あんまし学校来てないから知らないんだ。

「うー、年齢のことを言うと退学にしちゃうゾ？」

子供のようにおどけて笑っているが目がマジだ。

「すいませんでしたっ!!」

「分かれば良いんだよ、分かれば」

「玩具いる？」

私はポケットから某キャラメルに付いてくる木の玩具を与えてみた。

「ありがとう♪」

校長先生にお辞儀されてしまった。

な、何か調子狂うな。

そのまま小さな校長は階段を降り始めて、やがては見えなくなった。

「世の中広いね、鈴ちゃん」

「うん……」

「我でもアレは若すぎると思うな」

「この世の神秘だ……」

呑気に呟く私たちはこのときはまだ来るべき悪夢を知るわけもなかった――。

グリコの玩具は子供に〈好〉かれる。(後書き)

作者「貴様らに平和は無いと思え！」

鈴「その言葉私にだけ言ってますんか!？」

雛宮「そうですね、今回は趣向を変えて会長さんを……」

鈴「あ、逃げた」

校長「廊下を走ってはいけませうん!!」

鈴「そう言ってる自分が走っていることはスルーなんですね」

校長「私がル〜ルなの〜♪」

神栖「無茶苦茶だ!!放せ〜」

雛宮「力強いね、校長……」

作者「そりゃそうだ。年増———ぐふっ」

鈴「へっ、いい気味だ」

神栖「リィナという奴に口が悪いと言われたくなかったら助けろ！」

鈴「校長先生、その子がオバサンとか言っていましたよ?」

校長「後でじっくり聞いてあげるからね？」

神栖「茅ヶ崎、殺してやる……」

雛宮「今回は根暗とオレンジが活動開始」

鈴「え、それだけ？」

校長「下手に次回予告しでずれたら大変なの、だからだよ？」

鈴「ま、とりあえずその子頼みましたよ？校長先生」

校長「了解です♪大人のおっもちやであっそびましょう☆」

神栖「嫌だああああ……!!!!」

老人には〈虐待〉を。（前書き）

何か知らない間に二十話までやってきました。

誤字や脱字、意見等々ありましたらどうか連絡お願いします。

私が泣いて喜ぶと思います。

ではでは本日も駄文をお楽しみ頂ける事を祈って……。

老人には〈虐待〉を。

「ゲームってさ、所詮プログラムの集まりなんだよね。だったらさ、それを現実には〈転換〉したらどうなるんだろうね」

「何ですか？ 私にそれをやれと」

「言ってみただけさ、面白いだろうなあ」

ふと呟いた〈混乱〉が眠そうに背伸びをした。

屋上を出る階段へと歩き出した〈混乱〉に〈転換〉は無感情な瞳を向ける。

「できる限りやってみましょう」

「ん、あんがと」

ヒラヒラと手を振って、笑った〈混乱〉はそう言って重い扉を閉じた――。

「ようこそいらっしやいました！！ここは校舎三階、モンスターも強くなっております。ご注意ください」

「誰だお前？」

前回も同じこと言った気がするんだが……。

三階まで上がってきた私は変なおじいさんに会った。

「ようこそいらっしやいました!!ここは校舎三「んなことは分かります!!」「モンスターも強「良い病院紹介してあげましょうか?」意を」

何だその顎髭は、いつの時代の人間だよ、お前。

帰れ、過去に帰れよ。

「ようこそいらーーグフツ」

「よし、行くぞ茅ヶ崎」

会長がおじいさんに蹴りを入れた。

おじいさん、ゴメンね、きっと彼(彼女?)にも悪気は無いと思ー
ー。

「ウザいから沈んでろ!」

わないこともない気がします、はい。

少し遅れて雛宮さんが階段を上ってきた、むう、汗臭い。

「この人の体って結構重くて、何ていうか臭わない?」

「えと、まあ少しは」

すごく臭うとは言えないので適当に流すことにする。

それにしても何なんだモンスターって、おじいさんは揺すっても起きてくれない。

「オーイ、起きてくださーい」

私はペチペチと乾いた音をさせておじいさんの頬を叩く。

「んん……」

おお、起きたようだ、ラッキー。

「オヤジだってな……」

「？」

ん、どうしたんだろう、おじいさん。

「オヤジだって若い少女を抱きたいんじゃないぞ!？」

「知るかつ!！」

警察行ってこい、てかとつとくたばって逝け。

「グギャギャギャギョゲエエエ!！」

「普通にキモいんですけど!？」

飛び掛かってきたおじいさんはとても見た目通りの年齢とは思えないスピードで迫ってくる。

いや、普通に蹴り飛ばしたけどさ。

だって見た目以上って言うっても結論的にはオヤジに毛が生えたぐらいなんだもん。

「グゲ……ゲ」

「茅ヶ崎、三階とは私の知らない内に荒れてしまったのだな」

「ハア？何を言っ……」

振り返った私は思わず絶句してしまった。

そこには見たこともない森林が広がっている。

挙げ句の果てには鳥すらが飛び回っている。

ここ、学校だよな。

事切れたおじいさんを蹴り飛ばして、もう一度だけ起こしてみた。

「ん、やあさっきの君かい。私の役目は終わっ……へブッ!!」

「これはどういうことか説明してもらいましょうか」

おじいさんの顔を叩いて、無理な方向に頭を回す。

「イタタタッ！無理っ、無理っですってねえ」

「どういふことですか？」

「説明は自分たちで飛ばしたじゃないですか！」

まあ、そりゃあそうだけどさ。

おじいさんも悪かったと思うんですけど。

「渋ってないでさっさと言え」

「RPGですって、スライムとか魔王の世界です！！イッツ、フアンーーーー」

「あ、もう良いです」

今度は殴り飛ばして意識を飛ばしてやった。

老人虐待？

常識が通じる世界だったらそうですね。

「さ、行きましようか♪」

「茅ヶ崎、お前、人権って知っているか？」

「会長さん、もう良いですか？」

会長は雛宮さんの目を手で覆って、今のやり取りを隠していた。

「私がいつも迫害されているんですから、良いじゃないですか」

「会長もやって欲しいんですか？いつでも縄で吊し上げて蹴って差し上げますよ？」

「……遠慮しておこう」

顔が青くなった会長は雛宮さんもといきモオタの目から手を離した。

ホントはそんなことは出来ないんだけど気付かないようだ。

雛宮さんの体でそんなことするわけないでしょ、もう。

そんなことを思った直後、雷が落ちたような吠え声が廊下の先から聞こえてきた――。

老人には〈虐待〉を。(後書き)

鈴 「うわあ、また何か出るんだ……」

神 栖 「当然だ、どれだけ予定より遅くなってると思っているのだ」

作 者 「言っとくけど、力なんて効かないから」

鈴 「鬼畜鬼畜鬼畜鬼畜k……」

雛 宮 「鈴ちゃん」

鈴 「死n……じゃなかった、何？」

雛 宮 「次話は火を吹く魔物が出るんだって」

鈴 「……ドラゴンでしょ」

作 者 「正解」

鈴 「ドラ○エじゃないですか!？」

作 者 「何、竜王がいいの？」

鈴 「結局ドラゴンです!!」

雛 宮 「スッゴいドキドキしてきた!」

神 栖 「この刀で竜を斬ってみるのも良いものだ」

鈴 「覚えてます？ あなた今雛宮さんですよ」

神 栖 「後は頼んだぞ、茅ヶ崎。我と雛宮を守ってくれ」

鈴 「やっぱりそうなるんだ……」

雛 宮 「それではさようなら♪」

神 栖 「また見てくれるな？」

〈竜〉を蹂躪す。(前書き)

最近はお加曲を電車の中で聞きながら打ってます。

今回はチート話なのであまり楽しくないと思います。

どうかご容赦を。

それでは駄文をご評価下さい(鑑賞って言うのかな?)!

〈竜〉を蹂躪す。

押さない！

走らない！

喋らない！

これな〜んだ！？

答えは火事など身の危険を感じた際にとりあえず守るところと教えられるアレ。

え〜と、これって正体不明の化け物に遭遇したときも使えますか？

「結論、無理！」

「何を言っているのだ、茅ヶ崎」

「会長、逃げても良いですか？」

「良いわけなからう、戻らないとは習わなかったのか？」

ああ、そんなのもあったな。

でも今はそんな問題ではないですよね。

「そんな低次元の問題じゃないんです！！」

「我に一生このままの姿でいろと申しておるのか!？」

いや、そこまでは言っていないですけどね。

この先にヤバイ何かがいるって、生きるか死ぬかの問題なんですって。

四階があるはずなのに空が見えるってどういうことですか？

階段を探しても何故か見つからないし、この木々は本物だし。

無茶苦茶にも程がある。

試しに地面に落ちていた石を拾って、明らかに三階の広さを越えている湖に投げ込んでみた。

石の落下した位置から円形の波紋が生まれ、水面が揺れる。

「これって本物なのかな？」

雛宮さんが近くにあった花を摘んで匂いを嗅ぐ。

うお、キモオタの姿でそんなことしないでくれ、吐き気がする。

「少なくとも我が校舎にこんな広さは無いな」

「さっきの声も気になりますから、屋上には行ったことにして早く戻りましょう!」

「我に不正を働けと?」

「そうじゃないんです。もっと合理的な判断をして欲しいと言ってるんです」

ああもう、面倒くさいな、この人。

あなた、さっきの声聞こえてましたよね!?

少なくとも私たち人間よりは遥かに大きな生き物の声でしたよ?

「ん、茅ヶ崎。何か聞こえないか?」

「何か風を切るような音がするよ?」

あー、認めたくないが何かしら大きな物体が飛んで来ているのは何となく分かる。

後ろ、確かめてみましたよ。

そりゃあ立派なドラゴンでした。

爬虫類のような鱗が全身を覆い、背中からは空を埋め尽くすような翼が広がっている。

……え、これって戦わなきゃならないんですか?

グギャアアアア!!!

至近距離での咆哮が私たちの足を地面に縫い付けた。

口から滴る涎が現実なのだと訴えている。

「会長、何とかして下さいよ……」

「ば、馬鹿者。規模が違いすぎる……」

やがて私たちの目の前に降り立ったドラゴンはグルリと辺りを見回して獲物を確認した。

「消えろ!!」

仕方がないが力を使うことにして私はそう念じた。

そうすることで前回のようになくなって無くなってくれるだろう。

にも関わらずドラゴンは前足を上げて地面に叩きつけた。

轟音が周囲に響き渡り、地響きで三人は宙に浮かび上がる。

「ええええええ!!」

「うおっ!!」

「キャッ!!」

三番目の声、誰が言ったとは言わないが、こんな状況でも吐き気はする。

「茅ヶ崎! 口を覆っている場合ではないだろ!!」

「ちょ、待っ……」

「大丈夫？ 鈴ちゃん」

げ、原因があなたですなんて死んでも言えない。

今にもドラゴンさんが襲ってきそうなんだが……。

何で消えてくれないの？

『鈴、そいつは奴らのボスである核です。物理的でなければ〈力〉は効きません』

以前襲われたときにリィナが言っていた〈核〉という奴なのか。

「会長、雛宮さん連れてちょっと隠れていてください」

「嫌だ、お前も来るんだ、茅ヶ崎」

「隠れていてください!!」

私が必死に叫ぶ姿を見て会長は何を思ったかその言葉に渋々従った。

「……死なないでくれよ、これ以上人が死んでいくのを見たくないんだ……」

そう悲しそうに呟いた会長は雛宮さんを連れて逃げ始めた。

「さあ、殺り合おうか……」

会長と雛宮さんが見えなくなったのを確認すると、私はドラゴンと対峙して歩み始める。

すると奴は急に長く尖った尻尾を振り回してきた。

「尻尾は私には当たらない」

ゆっくりと歩く私の直前を尻尾の先端部が通過していく。

「この場に無数の刀を顕現し、出現次第それは鱗を貫いて突き刺さる」

言葉を言い終わらない内に次々と様々な形をした刀が現れ、ドラゴンの皮膚に突き立てられていく。

一度仰け反ったドラゴンは大きく息を吸い込み、その牙の生えた大きな口で勢い良く炎のブレスを吐き出した。

「炎は私を避けて通り、突き刺さった刀は爆発する」

私を避けた炎は周囲の木々を焼き尽くしていく。

直後ドラゴンに突き刺さった刀が爆発した。

悲鳴をあげる間も無く、ドラゴンは粉々に霧散してしまう。

私は深く溜め息を吐くと会長たちが逃げていった道を引き返した。

数分歩くと見慣れた巨体が倒れている。

「雛宮さん！？」

何故か会長の姿が見当たらない。

何度も揺さぶると起き上がる雛宮さん。

「会長さんがっ！！オレンジ色の髪の人に！！」

かなり動揺しているよう言葉も通じないが会長はオレンジに拐われたようだ。

必死にしがみつく雛宮さんは泣きながら呻き続けた――。

〈竜〉を蹂躪す。(後書き)

鈴 「うわあ、とうとう二人になった」

雛宮 「他の皆は？」

作者 「まだ三階に着いてないよ」

鈴 「遅っ！」

雛宮 「これで鈴ちゃんは私のもの？」

鈴 「嫌だあああ!!！」

作者 「次回予告」

鈴 「会長を助けにいざ行かん！」

雛宮 「苦戦します！」

作者 「チート過ぎても楽しくない」

雛宮 「そういうことでサヨウナラ☆」

鈴 「また見てね♪」

〈憎悪〉を燃やして。（前書き）

また予定がずれましたです。

下書き無しなものでしてスイマセン。

しかも面白くないし。

どうか生暖かい目で末永く見守って下さい。

感想や意見、指摘などありましたらよろしく願いします。

もちろんリクも大丈夫です、現に試着室の場面は友人の要望です。

それでは今日も駄文を読んで下さる方がいることを願って。

〈憎悪〉を燃やして。

「……………」

何がしたい、何がしたい。

私の中で渦巻く憎悪の気持ちは行き場も無く心を侵食する。

会長が何をしたというのだ。

静かになった辺りを睨み付け、何も出来なかった自分を恨んだ。

会長は何としても取り戻す、そのためなら鬼になろうと構わない。

「鈴……ちゃん？」

「……………何？」

「死んだら駄目なんだよ？会長さんは私を守って、死ぬなって庇ったの……」

あの会長はいったい何なんだ、人を襲う癖にホントに嫌がることはない。

妙に優しいところもあって、嫌いになれない。

お人好しにも程がある。

「……………会長、助けてくる……………」

「駄目だよ、死んじゃうよ」

「……目を瞑って」

「嫌だ、鈴ちゃんがなくなっちゃう。戻ってこれなくなる、そんな気がするの」

私は嫌がる雛宮さんの目に手を置いて眠るように念じた。

「い……や……鈴……ん」

必死に眠らないように抵抗する彼女はやがて私を掴んでいた手を放し、意識を失った。

雛宮さんは保健室に送られ、今から一時間前までの記憶を失う。

そうなるようにして私は綺麗な粒子になって目の前から消えていく雛宮さんを眺め続けた……。――。

「何やこりゃ……」

「へえ、学校の三階って森になってるんですね」

「いや、違うから――!」

間違っって認識しようとした姉様を連れ戻す。

「ようこそ――ズドンッ」

「あれ、何かいませんでした？」

「き、気のせいやろ」

あたしは突然登場したせいで反射的に撃ってしまった老人を蹴っ飛ばして茂みに突っ込んだ。

周囲には上に続く階段は見当たらない。

先に鈴たちが行ったはずなのだが柔らかな地面にはそれらしき足跡は残っていない。

「さあ、ジャンケンを続けますよ♪」

「これからは無しや、何かおかしい。先に行ったはずの鈴たちの足跡がないやろ？」

「あ、ホントだ」

天井には見かけだけの空があり、その上から大きな威圧感を感じる。

何かが屋上で待ち構えている、そんな気がする。

ということは鈴たちは大丈夫なのだろうか。

足跡が消されているところも気になる。

霞は首を振って考えることを止める。

鈴と千代が心臓を抉られている場面など――。

雛宮さんが消えていったのを見届けて私はゆっくりと立ち上がった。体が焼けるように熱く火照っている。

階段はどこにあるんだろう。

三階の一带を森林にするぐらいだ、きっと上の方にいる。

ああ、怒っているのは会長を拐ったから？ 雛宮さんを泣かせたから？ それとも……。

私はぐるぐると回る頭の中、先程ドラゴンが現れた湖から真っ直ぐ続く道へと戻って来た。

「……………」

今考えるとドラゴンはどこから飛んできた？

羽ばたく音はしたが風は全く無かった。

この湖から離れていくにつれて、出現するモンスターは弱くなっていく。

つまりここが三階の中心部なのだろうか。

試しに一回目投げた石ころより遥かに大きな岩を浮かせて湖に突っ込んでみた。

すると湖は妙に青白く輝き、無数の小さな稲妻を生じ、その岩を弾き返した。

アタリのようなだ、ゆらゆらと揺らめく表面には偽物の空とは違う空が映っている。

それを見ると私はためらうこともなく湖に身を落とした――。

「〈混乱〉、来ましたよ」

屋上で暇そうに空を見上げていた〈転換〉は静かに呟いた。

「ヒヒ、分かった。守ってくれヨ？俺は弱いから強いんだ」

「そんな必要はありません。あなたは負けません。私はあなたさえいてくれれば良いんです」

「俺もさ、死なないでくれよ？俺だけのプリンセス」

〈混乱〉は〈転換〉に口付けをしてまた笑った――。

〈憎悪〉を燃やして。（後書き）

霞 「最近クオリティがさがっとるで」

作者 「最近は一時間で書いてるから仕方無いんです」

リイナ 「言い訳ですか？」

作者 「そりゃあ一話目みたいに何日もかければ少しはましになるけどね」

霞 「そうやって明日も明後日もごまかしくと読者いなくなるで？」

作者 「う」

リイナ 「さ、次回予告は」

霞 「チート崩壊するで、敵が強すぎや」

リイナ 「いったいどうなるの？ 鈴」

作者 「さあ、気分で左右される」

霞 「どうせ駄文を作り上げるだけや」

リイナ 「そうですね」

作者 「酷い」

霞 「ほな♪」

リイナ 「また今度☆」

〈混乱〉は乱立する。(前書き)

前略、いかがお過ごしでしょうか？

馬鹿な私は頑張り（でもないけど）物語を紡いでいきたいです。

予約掲載って最高！

褒め称えてあげたい、考えついた人。

それでは今日も駄文を楽しめるよう願って。

〈混乱〉は乱立する。

「ヒヒ、キヒヒヒヒ」

私が屋上に出てきて初めに聞いたのは気味の悪い笑い声だった。

「……………」

「どうしたんですか？ 〈混乱〉、気持ち悪いですよ」

「ほっとけ、これからすることを考えると楽しみになったただけだぜ」

オレンジ髪の〈混乱〉は自分の身を抱き締め、恍惚の表情を浮かべた。

呆れたように肩をすくめて私に向き直る根暗少女は床に転がっていた会長を抱き寄せて後ろに下がった。

「任せましたよ、〈混乱〉」

「おうよ、〈転換〉はサポートよろしく！」

ガッツポーズをした〈混乱〉は面白そうに私を眺めた。

「おーい、聞こえっか？ 今から俺がお前を殺るけど恨むなよ？」

「燃えろ」

何が殺るだ、少なくともこいつらは人間じゃない、それだけは感じ

取れる。

〈混乱〉の服の所々から発火し始める。

それでもなお笑っている〈混乱〉は不気味で、化け物じみている。

「キヒヒ……熱いよう、熱いようってか？」

「何が目的なんだ？」

「目的？そんなもの〈力〉が欲しいからに決まっているだろう」

〈混乱〉がまるで埃でも払うかのように炎を消し去った。

「心臓だよ」

「……………」

決まりだ、殺らないと殺られる。

ならどうすればいい？

決まっている、この二人を殺してやる、殺してやる。

「おー、怖え」

「棒読みじゃないですか、〈混乱〉。私は力の限界が見てみたいのです」

落ち着け、冷静になるんだ。

私は銃を出現させて構えることにする。

「撃てる？撃てるのかなあ？人を撃てるの？君に」

ふらふらと歩み寄って銃口から込められている弾丸を覗き込んだ。

迷いは消えた、何のためらいもなく私はその不思議な赤色をした瞳に向けて引き金を引いた。

パンツと乾いた音が辺りに響く。

すると弾丸は〈混乱〉の目、そして頭蓋骨までをも貫いて脳味噌のような半液状の何かを飛び散らした。

ビクンと震えて〈混乱〉は後ろに倒れ――。

「――ヒヒヒヒヒ、駄目だ。こんなのじゃ駄目だよ！？」

倒れずに踏み止まり、また不愉快な笑い声をあげ始めた。

何なんだ、脳味噌やられて生きてるって生きてるのか？

「終わり？じゃあそろそろ俺も動くよ！？」

そう言った〈混乱〉は足を振り上げて何かをしようとして、ふと動きを止めた。

「あれあれ？片目が見えないな、よっと」

そのよっという声で空洞になった眼孔を片手で押さえつける。

次に手を離れたときには既にあの赤い眼球が元に戻っている。

「さて、続けますか」

何事もなかったように〈混乱〉の足は床に叩きつけられた。

地震が起きたと思うほどの揺れが校舎を襲う。

余韻が残り、妙に高い音が聞こえる。

〈混乱〉は歌っていた。

歌詞も無く、メロディーもチグハグな音だ。

その直後、〈混乱〉の周囲に無数の魔方陣のようなサークルが出現した。

「ほら、学生の魂を集めてみたんだ」

幽霊のような透ける体をしていること意外、ごく普通の生徒たちが集まっている。

「こいつらは負の塊、殺してしまっただけで構わないぜ」

「……………」

「じゃ、行っちゃえ」

フラフラと歩き出したそれらは生きた人間の魂。

殺してしまえば、きっと本人は変わってしまうだろう。

私の近くに來たそれらは私の体に触れると同時に体内に溶け込んでくる。

魂に刻み込まれた負の記憶が脳に流れ、侵食していく。

「ヒギッ、うあああああうああ!!」

見たくない、こんなもの見たくない。

一人、また一人と私の体に触れていく。

「ooooooooooooッ!!」

もう声にならない。

「ヒヒ、苦しいだろ？お前の不幸なんて軽いもんだろ？」

ああ、そうだろうな。

痙攣を起こす程にもう意識を保つのが苦しい。

だが、けれど幸福にしようとしてくれる人がいる。

それが違う、唯一の差異点だ。

そこまでしてくれる人を無視して一人苦しみを避ける？

だから――。――。

「それがどうした!!」

私は笑っていられるのだ。

私はもう一人じゃない。

助けてくれる人がいる。

「そうか、じゃあもう死んでいいよ」

最後の魂が私に入り、苦しみが終わる。

床に倒れ伏した私を見下し、相変わらず憎たらしい笑顔をしたままの〈混乱〉はしゃがんで私の心臓に手を伸ばした――。

〈混乱〉は乱立する。(後書き)

校長「私に名前頂戴☆」

作者「無・理♪」

校長「というわけで誰か送ってくれるよね、きつと」

作者「今は予約掲載の分を書きまくってるんで」

校長「何で投稿してるの、暇人だから？」

作者「読者が減るのが怖いから」

校長「チキンめ」

作者「年増、ツルペタめ」

校長「そういうのが好きな人だっているの〜！」

作者「じゃあ、その人たちに名前期待しときなさい」

校長「は〜い」

作者「時間もないので次回予告は無しです」

校長「それじゃあ、まったね〜☆」

あらすじの様な語り（一週間後削除します）。（前書き）

七時と八時にアップします！

あらすじの様な語り（一週間後削除します）。

かなり間が空いてしまっているため、読み直す必要のないための語りです。

ふっ、俺は覚えてるぜっ、な人は読む必要性ナッシング。

注、タイトル通り一週間後削除しますのであしからず。

えゝ、どこから話したほうが良いのか分かりませんが二章を大まかに。

〈力〉を使ってリィナと共に学校に転入したことにした鈴（湮南）。

何人もの生徒に（男女問わず）告られまくります。

一部歪んだ方もいらっしやいますが、はい、キモオタのことです。

そこに会長である神栖稜弥が風紀乱すな、とか無茶苦茶でリィナを人質に鈴の争奪戦を開始。

予選↓ジャンケン

一回戦↓叩いてかぶってジャンケンポン

んでもって着替えてこいとか会長が言うわけですよ（この変態っ！）。

着替え終わると何か生徒たちの中身が入れ替わっていて変なことに。

二回戦↓グリコ

そのままゴールである屋上を目指すと三階が森でした。

いきなりのRPG展開。

突然出てきた竜を倒してたら雛宮さんイン神栖会長がオレンジ髪の
〈混乱〉ってのに攫われます。

いざ助けに行くのは良かったんですが心臓取られてオワタって場面
です。

要するに殺されました、主人公。

分んなかったらスイマセン。

お手数ですがもう一度読み返して頂ければと思います。

（それを防ぐために書いたんだろうに……orz）

まあ、そんなところです。

これからも宜しくお願いしますね？

感想とか意見、決勝戦の内容とかも待ってます。

ホント、切実に。

ではお楽しみ頂ける事を願いながら！

体を蝕む〈負〉の感情。 (前書き)

いや、テスト長かったです。

日曜を挟んでって……。

本日よりチョコチョコ投稿を開始します。

待っている方（いるとは思いませんが……）スイマセンでした！

意見、感想待ってます。

体を蝕む〈負〉の感情。

あれ……？

どこだココ？

見たことも無い真っ白い何もない空間に私は突っ立っていた。

私は確か〈混乱〉が呼び出した魂たちの前に倒れて。

それで最後に見えたのは、あの不気味に笑う奴の顔。

それから胸の辺りに気持ちの悪い感覚がして……。

あ、死んだんだ……私。

大して悲しくもない、もとより死にたがっていた身だ、だけど。

最後ぐらい幸せに死にたかったな。

会長は助けてないし、霞やリイナに挨拶ぐらいしたかった。

今思えばホントに最近は災難だった。

リイナが突然現れて〈力〉を与えますとか言って、女の子になったら何故か襲われるし。

霞は何だか途中からキャラ崩壊して変態になっちゃったし。

楓さんは……うん、大人の経験フル活用。

会長だって人でなしの鬼畜変態野郎だし。

駿河くんは優しくて唯一の常識人。

キモオタは（略）。

雛宮さんはちょっとおかしな所もあるけれど、私の世界で一番好きな人。

そんな人たちに囲まれて、私は生きてたんだ。

あれ……？

おかしいな……。

やっと死ねたはずなのに。

ずっと前から望んでいたのに。

どうしてこんなにも涙が止まらないんだろう。

あんなにも死にたいと思っていたのに。

今は死ぬのがひどく悲しい。

死にたくない。

まだ皆と生きていたい……。

嫌だよ、もう会えなくなるなんて。

こんな終わり方ってない。

不幸ってこういうこと？

皆のいる世界から自分一人だけ切り取られて、皆だけで生きていく。

取り残された私は何も出来ずにただそれを見つめるだけ……。

なんて救いようもない、残酷な人生。

「だったら、殺されたことをリセットすればいい。心臓を作り治せばいい」

阿呆か、お前。

そんなことは出来ないんだろう？

「出来るさ。それなりの代償を貰うがな」

大体何だお前。

黒い姿してるじゃないか、死神か何かだろ。

地獄に連れていくなら早く連れていってくれ。

「お前は俺に身を任せるだけで良いんだ。そうしたら俺がお前を生き返らせてやる」

体は俺のもんだがな、とか言うんだろう？

ありがちな古い手使ってんじゃないよ。

嫌に決まってるだろ。

「いや、あの二人を倒したら別に返してやっても構わない」

……。

……。

……。

ホントに言ってるのか？

「ああ、どうだ？」

出来ることなら生き返りたい。

お前は誰なんだ、何でそこまでするんだ。

「お前だよ、湮南。その内気付くときが来るさ。お前の弱いところが俺なんだ」

意味分かんないよ、どうしてこんなにも生きたいと思うんだろう。

喉なんてあるわけないのにカラカラと焦燥感が襲う。

「契約は受理したと受け取っておく。さあ、体の力を抜け」

直後、私の体を繋ぎ止めていた何かが解かれた。

「安心しろ、涅槃の悪いようにはしないよ」

懐かしいような、どこか昔に聞いたことのあるような声がした。

暖かで、安心する声。

ああ、この声は俺の――。

「鈴！！起きて……死なないで下さい！！」

「無駄だってばあ、心臓取り出したんだから神様の力でも生きれないさ」

リイナが必死に鈴ちゃんの体を揺すっているのが分かる。

「人はな、死んだら生き返れないんやで！？」

銃口を〈混乱〉に向けていた私は叫んだ。

「だから？」

〈混乱〉は興味の無さそうに首を傾けた。

その右手にはある何かが一定の速度で動いている。

「ほら、綺麗な赤色。彼女はまだ生きている」

心臓だった、誰の？

分かってるくせに。

小さく鼓動するそれは鈴ちゃんの体から抉り出されていた。

「あああ……あああああ！！！」

見たくない、そんなもの見せるな。

私は持っていた銃を持ち上げ、ヘラヘラと笑っている〈混乱〉に銃弾を撃ち込む。

ただひたすらに。

まるで当たっている気がしない。

現に〈混乱〉は撃たれ続けながらも笑い続けている。

「笑うなああああ！！！」

最後の一発、それを不敵に笑う顔に叩き込んだ。

ビクリと一瞬だけ痙攣するが、やはり〈混乱〉が倒れることはなかった。

「〈混乱〉、遊ぶのも大概にして下さい。私たちの目的は神の力と永遠の命でしょう？」

「ヘイヘイ」

身体中に穴が空いているのに気にしていない〈混乱〉に〈転換〉は話しかけた。

壊れている、そうとは思えない。

私は脱力して、涙を流すことしか出来ない。

「それじゃ帰るとしますか」

「ああ、それと目撃者は殺してくるようにと聞きました」

「何だよ、早く言っとけよ」

私たちに向き合うと〈混乱〉は溜め息を吐いた。

殺される、その感情だけが私の中身を支配していた。

リィナはただ呆然としている。

「—————」

始めは何か空気の抜けていくような音だった。

〈混乱〉は何か異物を見るような目をして動きを止める。

「—————」

その声は私の後ろ、リィナの隣から漏れている。

「ヒヒ、何でかな？」

「—————」

私が振り向くのとその手がピクリと動くのが同時だった。

「何で、何で心臓が無いのに生きてられるんだよお！！」

〈混乱〉が叫ぶのと同時に彼女は起き上がる。

ゆっくりと、そして確実に。

「—————」

ただ口元から空気を漏らすだけの彼女は、その問いに答えることはなく、静かに笑っただけだった—————。

体を蝕む〈負〉の感情。 (後書き)

連投なので今回の後書きは略します。

次は一時間後ぐらいですw

塗り潰す〈黒〉輪。 (前書き)

連投です、何個かストックとして残しておこうと思います。

あと、短めです。

前回が少し長いので……。

ではどうぞ！

塗り潰す〈黒〉輪。

「—————」

立ち上がった鈴はゆらゆらと動きはするが足が定まっていなかった。

言葉を発することもなく、口元を吊り上げている。

「り……ん？」

圧倒的な存在感、まるで鈴などここにはいないように。

本当に嬉しいはずなのに、以前と違う雰囲気には私は近付くことが出来ずにいた。

同様に霞もその場を動かないでいる。

不意に腕を持ち上げた鈴は真っ直ぐに〈混乱〉の持っている心臓を指差した。

次の瞬間、一際強く鼓動したそれは〈混乱〉と隣にいた〈転換〉を巻き込んで爆発した。

「神の力ごとですか、〈混乱〉、大丈夫ですか？」

「ああ、だけど心臓は？」

「元に戻ったようですよ」

鈴は手の中にある自身の心臓を光の無い無機質な目で眺めていた。

やがて挟まれた胸の辺りにそれを埋め込むと驚異的なスピードで傷は塞がった。

「何なわけ？ お前」

「—————」

「大体お前の攻撃は俺には効かないだろうが。生き返ったからどうした」

「クヒ……クヒヒヒ、アハハハハ！！」

奇怪な笑い声を始めた鈴は突然笑うのを止めてじっと〈混乱〉を見据えた。

鈴を中心として空中に黒い輪状の波紋が広がり始める。

それは私たち、〈混乱〉に〈転換〉を巻き込んで屋上にあるもの全てをすり抜けた。

ふわりと体の軽くなったのを感じる。

直後、〈混乱〉の頭は鈴によってコンクリートの床に叩きつけられた。

「あれ？」

何が起こったのか理解できない、そんな顔だった。

ただ……。――。

「……痛い、痛いなあ！もう！！」

〈混乱〉は苦痛に顔を歪め、身悶えしている。

ダメージは〈混乱〉まで届いているようだ。

「こんなの聞いてねえよ、〈転換〉」

「私だって知るわけないですよ」

「鈴」

私が話しかけると黒い輪をいくつか漂わせていた鈴はピクリと反応した。

「何だよ」

ああ、やっぱりそうか。

「今は鈴ですか？それとも涅槃？」

「さあな」

彼、彼女はこちらを振り向くこともなく、大儀そうに空を仰いだ。

「もう、死なないで下さい。いなくならないで……」

「ああ、聞こえてた」

良かった、ホントに……。

涙が溢れて止まらない。

「霞もありがとな」

「……………」

地面にへたり込んで呆けていた霞は微笑んで頷いた。

「もう一回、殺してやるよ」

「……………」

あの〈混乱〉の笑っていた顔が急に獲物を狩る目に変わったのを鈴は無表情に見つめ返した――。

塗り潰す〈黒〉輪。(後書き)

鈴 「短い」

作者 「ですよ〜。千文字で……自分でもワロタ」

リイナ 「もう正直しんどい、私に誰かを襲わせw」

作者 「もうすぐ終わるから、ね？」

鈴 「そんなわけで次回は？」

作者 「相変わらず、つまらん戦闘パート」

リイナ 「ふう」

鈴 「あっそ」

作者 「(すっごい冷めてる……)」

リイナ 「ま、そんなわけで次回もグダグダです」

鈴 「じゃーな」

リイナ 「それでは☆」

ある日の〈記憶〉。(前書き)

ごめんなさい!!

諸事情により何日かに一回の投稿に戻させて頂きます。

成績が……うん。

後書きも今回は省略していますのでご了承下さいませ。

ある日の〈記憶〉。

始めに見えたのは涙を流して俯いているリィナだった。

「――――」

その名を呼んでも口から空気が漏れるだけ。

手を伸ばそうにも体はいうことを効かない。

狭い視界の中、見える彼女は俺のことを呼んでいた。

「――――」

（さあ、体を願いに沈めろ、私に身を任せろ）

体内であいつが何やら囁いている。

ああ、俺は……リィナたちを守りたい。

もう目の前で人が死ぬのは見たくないんだ。

二度とあの孤立感は嫌なんだ。

一人ぼっちの何か物足りない、自分が自分でなくなってしまう。

色あせた世界に残された俺は生ける屍のようだった。

二年前のあの日は雨が降っていて、いつものように妹とショッピング

グに出かけたんだ。

「どっちの服が良いと思う？」

白色のコートと薄い水色のカーディガンを広げて見せてトレードマ
ークのポニーテールを揺らしながらアイツは俺に笑いかける。

「どっちでも良いだろ、両方買えば？」

「お兄ちゃんに選んでもらった服がいいの！」

「……お前、稀に凄く恥ずかしいことを平気で言うよな」

「エヘン」

「いや、褒めてねえから」

こうなったら俺が選ぶまで一時間でも悩むような奴だ。

別に待っていても構わないのだが、周囲には女性向けの店ばかりが
立ち並び、男一人でその中にずっといるのはかなりきついところがある。

「カーディガンの方が良いんじゃないか？」

「あ、やっぱり〜？私もそう思ってたんだよね」

決まってたんなら聞くなよ、呆れて溜め息を吐いた。

パタパタと足音をさせてコートを元あった場所に戻すとアイツはそ

のままカーディガンを持ってカウンターに向かう。

紙袋を抱えたアイツは満面の笑みで同じように戻ってきた。

「帰ろっか？」

「ああ」

アイツは小さい頃からお菓子とかを買うために俺を連れて回っていたのもあってか、どこかに行くときはとりあえずは俺を連れていくようになった。

この日もいつもと同じとばかり思っていたんだ。

「エヘヘ♪」

「……気持ち悪いからその笑い方止めろ」

「お兄ちゃんに買ってもらった服……エヘヘ」

先ほど買った水色のカーディガンを着てクルクルと回ってみせてくる。

その裾が蝶のように舞い、柔らかに色を映えさせる。

「あー、もう幸せだなー。嫌だな、ーなーなんて」

「え、何て？」

「んーん、何でもないよ」

表情を一瞬だけ曇らせるアイツは薄く笑って俺に最期の言葉を呟いた。

「お兄ちゃんは幸せになるんだぞ？いくら不幸でもいつかそれに釣り合う幸福がやって来るんだから」

この後のことはあまり覚えていない。

鮮明に覚えているのは目の前で拡がる赤い水溜まりに投げ出されたアイツと妙に冷たい雨がただ降っていたことだけだ。

そのうちに誰が呼んだのかパトカーのサイレンの音がして、長い間連れていかれた警察署で事情聴取された。

ダレガヤツタンダ。

アンナザンコクナシタイミタコトナイ。

聞こえてくる声は耳を通り抜け、言葉として理解できない。

いや、そうすることを拒否している。

中年の太った警察官が俺に向かって話しかけてきた。

「いいかい？君の妹は死んだんだ……」

「……………」

「もうこの世にはいないんだ」

黙れ、事実を並べ立てるな。

聞きたくない、喋らないでくれ。

頼むから、ホントノコトヲイワナイデ。

（願いは理解した、体の力を抜け）

「……………」

言葉にならない叫びは、願いは空気を震わせる。

自分の体から少し離れて後ろから見ているような感覚が襲う。

そして動かなかったはずの俺の体は自然に立ち上がった。

世界が狭く見える、全てを知ったような感覚だ。

〈混乱〉が何やら喚いているが今は生き返った嬉しさで今は気にならない。

生きている。

俺は、生きている。

その気持ち体がにも伝わったのか口元がゆっくりとつり上がるのを

感じた――！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797/>

幸福宣言！

2010年10月13日22時28分発行